

総目録

著者	タイトル	巻	出版年	頁	項目1
神学ダイジェスト研究会	〈巻頭言〉刊行にあたって	1	1965	2	巻頭言
Y・コンガール	母なる教会	1	1965	3～6	教会論一般
R・シュナッケンブルク	信仰の聖書的概念	1	1965	7～12	信仰
C・デーヴィス	説教の神学	1	1965	13～17	司祭職
L・デップナー	司祭生活	1	1965	17～18	司祭職
K・ラーナー	今日の司祭の信仰	1	1965	19～22	信仰
J・ダルク	教会と世間における修道生活の役割	1	1965	23～26	修道生活
L・ルグラン	独身生活	1	1965	27～29	修道生活
L・エルシ	黙想から観想へ	1	1965	30～32	祈り
R=L・ウシリン	教会における一般信徒の立場	1	1965	33～36	位階制
A・ベーム	世に仕えるキリスト者	1	1965	37～39	信仰生活
越前喜六	〈巻頭言〉無題	2	1965	2	巻頭言
H・ジェニー	典礼憲章の一般方針	2	1965	3～6	典礼憲章
L・ボロス	現代神学における死と死後の諸問題	2	1965	7～11	終末論
L・ベルナルト	司祭の独身と性の問題	2	1965	12～15	司祭職
K・ラーナー	霊を消すなかれ	2	1965	16～18	神学的エッセイ
M・D・シュニユ	時のしるし	2	1965	19～23	神学的エッセイ
J・ジント	初代教会における復活	2	1965	24～28	復活
F・カルデーニャ	完全な純潔と人間の感情	2	1965	29～32	修道生活
B・ヘーリング	不妊薬に関する神学的考察	2	1965	33～35	性倫理
D・マイヤー	真の従順に反する奴隷根性	2	1965	36～37	修道生活
越前喜六	〈巻頭言〉キリスト教の土着化について	3	1966	2	巻頭言
S・リヨネ	宇宙の救い	3	1966	3～10	終末論
A・ベア	エキュメニズムに関する教会の実践	3	1966	11～16	エキュメニズム
R・ラトウレール	啓示と歴史と託身	3	1966	17～21	啓示
M・D・シュニユ	貧しき者の教会	3	1966	22～24	教会論一般
P・アンシオー	告解の秘跡と教会の関係	3	1966	25～28	ゆるし
F・ウタール	都市における小教区の問題	3	1966	29～33	司牧
A・ヴェルゴート	大人の信仰生活の心理的条件	3	1966	34～38	司牧
F・ヴルフ	独身生活と童貞性	3	1966	39～41	修道生活
越前喜六	〈巻頭言〉将来の本誌の展望	4	1966	1	巻頭言
I・コロシオ	現代の霊性	4	1966	2～8	霊性神学
K・ラーナー	キリスト教と他宗教	4	1966	9～17	諸宗教の神学
『アメリカ』誌	なぜカトリック教徒になるのか	4	1966	18～19	神学的エッセイ
H・ラーナー	教会の本当の姿	4	1966	20～28	教会論一般
司教覚書	貧しき人々の教会	4	1966	29～30	教会論一般
K・コンドン	旅路の教会	4	1966	31～38	教会論一般
H・ツァーナー	現代世界に開かれた教会	4	1966	39～43	教会論一般
J・クイン	エキュメニズムと聖体	4	1966	44～50	エキュメニズム
I・ゲレス	司祭の独身は時代おくれか	4	1966	51～58	司祭職
E・リドー	レジャーの神学	4	1966	59～64	信仰生活
海老原謙吉	テイヤール・ド・シャルダンの聖体思想	4	1966	65～72	聖体

総目録

L・ベルナール	産児調節と人間の性	4	1966	73～77	生命倫理
P・ネメシエギ	〈巻頭言〉無題	5	1967	1	巻頭言
K・ラーナー	将来のキリスト者	5	1967	2～9	教会論一般
K・ラーナー	知られざるキリスト者	5	1967	10～17	諸宗教の神学
A・ジャニエール	無神論と現代	5	1967	18～25	無神論
J・ライリー	聖書をどう読むか	5	1967	26～34	信仰生活
I・de ラ・ポトリ(ポトウリ)	聖書にはあやまりがない	5	1967	35～42	啓示憲章
A・ベア	教会とキリスト教以外の諸宗教	5	1967	43～49	諸宗教の神学
J・ダヴィド	新しい結婚観	5	1967	50～56	婚姻
O・ゼンメルロート	正しいマリア崇拜	5	1967	57～64	マリア論
J・トマ	労働の神学	5	1967	65～71	キリスト教的社会思想
H・キュンク	恩恵の問題とキリスト者再一致	5	1967	72～78	マルティン・ルター
門脇佳吉	〈巻頭言〉経験の復権	6	1967	1	巻頭言
N・ローフィンク	旧約聖書はどう解釈すべきか	6	1967	2～9	聖書釈義学
H・ホルンシュタイン	聖書と伝承	6	1967	10～16	聖書と伝承
P・トレンブレー	神の十戒	6	1967	17～25	カテキズム
H・マッケープ	神の民	6	1967	26～33	教会論一般
W・リワク	キリストとキリスト者の支配 —黙示録にみる—	6	1967	34～39	黙示録
P・フランセン	教理神学の三つの道	6	1967	40～45	教義
H・リードマッタン	戦争と平和	6	1967	46～51	現代世界憲章
J・ラウシュ	無抵抗主義と敵への愛	6	1967	52～58	マタイ
J・ヌーナン	避妊	6	1967	59～65	性倫理
L・モンダン	奇跡のキリスト教的意味	6	1967	66～71	奇跡
B・ヘーリング	忘れ去られた兄弟愛	6	1967	72～79	司牧
福島禎一	〈巻頭言〉もっと人間味を	7	1967	1	巻頭言
E・リドー	サルトルのヒューマニズムとキリスト教	7	1967	2～11	神学的エッセイ
K・ラーナー	キリスト教的ヒューマニズムとマルクス主義的ヒューマニズム	7	1967	12～17	神学的人間論
E・パン	使徒的修道会と社会文化的変化	7	1967	18～25	修道生活
フランス調査報告	労働者への宣教	7	1967	26～30	司牧
H・ド・リュバック	すばらしき母「教会」	7	1967	31～38	教会論一般
B・ヘーリング	道徳生活の新しさ	7	1967	39～45	倫理神学一般
J・フックス	罪と改心	7	1967	46～53	罪
J・カトワール	教会と再婚	7	1967	54～59	婚姻
J・ムールー	信仰における理性の役割	7	1967	60～64	信仰生活
P・グルロー	キリストの秘義“死”	7	1967	65～72	キリスト論
L・ボロス	苦しみと死	7	1967	73～80	神学的人間論
林省吾	〈巻頭言〉対話	8	1967	1	巻頭言
P・ショーネンベルク	聖体におけるキリストの現存とは	8	1967	2～10	聖体
T・マートン	降誕のよき知らせ —修道者の立場からの読み方—	8	1967	11～17	神学的エッセイ
P・ビヤール	聖書における清貧	8	1967	18～25	新約聖書神学
F・ムスナー	史実のイエズスと信仰のキリスト	8	1967	26～33	キリスト論
H・スミス	現代人に典礼は意味があるか	8	1967	34～39	典礼一般
D・アムリーヌ	キリスト教的価値と世俗的価値	8	1967	40～48	倫理神学一般

総目録

H・U・v・バルタザール	福音的生活	8	1967 49～55	修道生活
J・B・メッツ	創造的態度和しての希望	8	1967 56～63	終末論
L・ボロス	摂理について	8	1967 64～67	神学的エッセイ
B・ヘーリング	変動する倫理神学	8	1967 68～75	倫理神学一般
J・フィルハウス	〈巻頭言〉神学と歴史	9	1968 1	巻頭言
J・クレーマー	キリストの復活の証言	9	1968 2～7	復活
M・ブレンドレ	初代教会の復活信仰	9	1968 8～14	復活
J・ダニエル	非神話化をどう考えるか	9	1968 15～18	新約聖書神学
A・ミシエル	原罪と人類の起源	9	1968 19～28	原罪
B・ヘーリング	キリスト者の成熟とは何か	9	1968 29～32	信仰生活
R・マッケンジー	聖書神学とはなにか	9	1968 33～40	聖書神学一般
J・マッケンジー	神感の社会的性格	9	1968 41～47	聖書神学一般
R・マルレ	世俗都市	9	1968 48～55	セキュラリズム
I・レウイス(ルイス)	子どもの告解の秘跡	9	1968 56～62	ゆるし
R・ローランタン	マリアとキリスト教的女性観	9	1968 63～71	マリア論
C・ムーニー	テイヤール・ド・シャルダンとキリスト論	9	1968 72～80	テイヤール・ド・シャルダン
I・カニャーダ	〈巻頭言〉神	10	1968 1	巻頭言
R・マルレ	新約聖書の非神話化理論について	10	1968 2～9	新約聖書神学
R・E・ブラウン	ヨハネ福音書はどのようにしてできたか	10	1968 10～17	ヨハネ
M・ノバク	祈りは「おねだり」か	10	1968 18～21	祈り
E・パン	都市の小教区	10	1968 22～29	司牧
E・グートベンガー	聖体の現存の秘義	10	1968 30～37	聖体
W・カスパー	教義の歴史性	10	1968 38～45	教義
W・カスパー	教義と福音	10	1968 46～48	教義
F・クロウ	教義の発展 —キリスト教一致の助けとなるか—	10	1968 49～56	エキュメニズム
J・マッケンジー	人の子は苦しまなければならない	10	1968 57～63	受難
D・マッカーフィー	自殺《その神学的考察》	10	1968 64～68	生命倫理
J・アルファロ	ベルソナと神の恵み	10	1968 69～75	三位一体論
K・ラーナー	無信仰者に信仰を説くには	10	1968 76～80	カテキズム
古谷功	〈巻頭言〉聖書補助学の再評価	11	1968 1	巻頭言
K・ラーナー	刷新する教会	11	1968 2～7	教会論一般
L・ヘードル	神の教会と対話	11	1968 8～15	教会論一般
J・ダニエル	科学者と信仰者	11	1968 16～19	自然科学と神学
C・ムーニー	歴史に流れる霊性	11	1968 20～26	霊性神学
H・ド・リュバック	あすの聖人	11	1968 35～38	聖人
J・ナポーヌ	ヨハネ福音書の主題	11	1968 39～45	ヨハネ
A・ジョルジュ	ルカ福音書における「神の子」	11	1968 46～51	ルカ
F・ヘイグ	聖書のヒューマニズム	11	1968 52～54	神学的エッセイ
J・マッケンジー	新約における律法	11	1968 57～60	新約聖書神学
D・マッカーシー	イスラエルは私の長子	11	1968 61～68	旧約聖書神学
P・グルロ	〈原罪〉を信すべきか	11	1968 69～77	原罪
編集委員	〈巻頭言〉公会議後まる三年を経て	12	1968 1	巻頭言
カナダ司教団	フマネ・ヴィテをめぐって	12	1968 2	回勅

総目録

イギリス司教団	フマネ・ヴィテをめぐって	12	1968 3	回勅
K・ラーナー	産児調節の回章《その波紋と課題》	12	1968 4~9	回勅
J・ゴルトブルンナー	信仰と深層心理学	12	1968 10~16	信仰生活
T・マルテンス	現代人と典礼	12	1968 17~26	典礼一般
Y・コンガール	一致を求める祈りの神学	12	1968 27~31	祈り
R・ラトゥレール	聖性は啓示のしるし	12	1968 32~39	啓示
J・マックオーリー	神をどのように考えたらよいか	12	1968 40~47	神概念
R・コムストック	『神の死』以後の神学	12	1968 48~56	神概念
R・ヘブルスウェイト	ジョン・ロビンソンの思想	12	1968 57~62	神学的エッセイ
J・デュボン	イエスの受けた試み	12	1968 63~69	新約聖書神学
H・シュールマン	イエスの幼年物語は歴史か —ルカ1~2章の前史の構造・特色・歴史的価値—	12	1968 70~76	ルカ
佐久間彪	〈巻頭言〉思而不学則殆	13	1969 1	巻頭言
J・ベッツ	過越の神秘	13	1969 2~11	新約聖書神学
ドイツ司教団	「イエスは復活した」	13	1969 12~15	復活
A・ヴァノア	共観福音書が語る受難	13	1969 16~21	受難
R・E・ブラウン	第四福音書のパラクリトス	13	1969 22~27	ヨハネ
P・アンシオー	性と婚約	13	1969 28~31	性倫理
H・ド・リュバック	人間像の理解へ	13	1969 32~35	神学的人間論
J・マレー	教会の権威と自由	13	1969 36~44	教会論一般
F・ヴルフ	司祭・修道者・信徒	13	1969 45~47	教会論一般
J・ギトン	あすの司祭像	13	1969 48~51	司祭職
J・バーンズ	説教きのつきょう	13	1969 52~57	司牧
R・ディディエ	サタンとは《その神学的考察》	13	1969 58~64	悪魔
L・A・シェーケル	言語学と文学からみた聖書釈義学	13	1969 65~71	聖書釈義学
K・ラーナー	聖体訪問のすすめ	13	1969 72~77	聖体
K・ヴァルケンホルスト	〈巻頭言〉心を信じる	14	1969 1	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの復活と史的批判	14	1969 2~11	復活
S・リヨネ	死と復活によるあがない	14	1969 12~16	復活
R・マレー	信仰を失うとは	14	1969 17~22	信仰生活
G・ランブ	世俗化とは —新約聖書と初代教会に探る—	14	1969 23~29	セキュラリズム
K・ラーナー	神への愛と隣人愛	14	1969 30~39	信仰生活
J・C・マレー	修道誓願にまつわる弊害	14	1969 40~45	修道生活
O・ゼンメルロート	聖体祭儀と内省	14	1969 46~50	典礼神学
B・ドレイア	イエスの奇跡の宣教	14	1969 51~56	奇跡
D・マッカーシー	神の言葉と文学的装飾	14	1969 57~62	聖書釈義学
B・デ・ピント	言葉の神秘性	14	1969 63~68	神学的エッセイ
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈1〉 —クルマンとブルトマン—	14	1969 69~78	キリスト論
安田貞治	〈巻頭言〉宣教者と神学	15	1969 1	巻頭言
H・U・v・バルタザール	貧しき者の信仰	15	1969 2~13	信仰
スイス司教団	だれでも平和のために尽くせる	15	1969 14	エッセイ
B・ヘーリング	福音の革命 —暴力か非暴力か—	15	1969 15~23	キリスト教的社会思想
C・スピック	神の前での人格的決断	15	1969 24~30	倫理神学一般
H・シュールマン	イエスを囲む生活	15	1969 31~39	修道生活

総目録

K・ラーナー	公会議後の神学と教導職	15	1969 40～49	教導職
G=M・ニッシム	告解の共同祭儀	15	1969 50～56	ゆるし
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈2〉 —クルマン説の批判—	15	1969 57～63	キリスト論
R・グアルディーニ	パラダイスとは	15	1969 64～68	終末論
A・ヴァネステ	原罪の神学と子どもの洗礼	15	1969 69～77	原罪
J=S・アリエタ	〈巻頭言〉神学における〈霊の識別〉	16	1969 1	巻頭言
K・ラーナー	無神論者もキリスト者たりうるか	16	1969 2～12	無神論
J・—B・コバーン	信仰の疑い	16	1969 13	信仰
L・エヴェリー	現代人は信仰しうるか	16	1969 14～17	信仰
R・ガロディ	キリスト教とマルクス主義者の対話 —マルクス主義の立場から—	16	1969 18～25	キリスト教とマルクス主義
J・B・メッツ	キリスト者とマルクス主義者の対話 —キリスト者の立場から—	16	1969 26～31	キリスト教とマルクス主義
L=J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第一回〉	16	1969 32～36	教会論一般
B・マッグラス	ミドラシュとは何か	16	1969 46～51	ユダヤ教
A・ダレス	象徴・神話・聖書の啓示	16	1969 52～60	神話
R・トウッチ	プロテスタント教会との再一致	16	1969 61～67	エキュメニズム
B・クラウス	洗礼の歴史	16	1969 68～76	洗礼
沢田和夫	〈巻頭言〉苦しい娑婆を陽気に	17	1970 1	巻頭言
L=J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第二回〉	17	1970 2～13	教会論一般
B・シュラー	教会の教導職も誤りうるか	17	1970 14～22	教導職
A・ブシャー	未来の宣教者	17	1970 23～25	福音宣教
H・ヌーウェン	新しい時代の司牧者	17	1970 26～35	司祭職
A・グリーリー	司祭はどのような指導者か	17	1970 36～42	司祭職
J・ラッツィンガー	聖書の人間観	17	1970 43～51	神学的人間論
F・デュルウェル	聖書におけるキリストとの出会い	17	1970 52～57	信仰生活
G・ディークマン	典礼と個人的信心	17	1970 58～64	典礼一般
F・ルパルニユール	キリスト者にとって病気とはなにか	17	1970 65～71	信仰生活
H・ブイヤール	キリスト教倫理と一般倫理	17	1970 72～77	倫理神学一般
土屋吉正	〈巻頭言〉信仰に生きる	18	1970 1～2	巻頭言
J・ティヤール	聖体における聖霊の働き	18	1970 4～8	聖体
I・de ラ・ポトリ	わたしは道・真理・生命である	18	1970 9～17	ヨハネ
D・ベルトラン	イエスは地獄について何を語ったか	18	1970 18～25	終末論
P・フイツィング	自然法と教会	18	1970 26～29	教会法
W・ブルクハルト	真理と教会の自由	18	1970 30～37	教会論一般
H・ミュラー	ルターの十字架の黙想	18	1970 38～46	マルティン・ルター
R・レドモンド	幼児洗礼 —歴史と司牧的問題—	18	1970 47～53	洗礼
M・ロンデ	修道生活はどうなるか	18	1970 54～57	修道生活
A・ドンデーヌ	世俗化と信仰	18	1970 58～67	セキュラリズム
A・ブルンナー	労働の聖化	18	1970 68～77	キリスト教的社会思想
市川裕	〈巻頭言〉司牧者	19	1970 2～3	巻頭言
K・ラーナー	秘跡としての結婚	19	1970 4～11	婚姻
J・ラッツィンガー	結婚の神学	19	1970 12～22	婚姻
R・グアルディーニ	性の乱れ	19	1970 23～27	性倫理
M・ベレー	此岸と彼岸	19	1970 28～35	終末論

『リゴリアン』誌	民衆の抗議と市民の不服従	19	1970 36～40	キリスト教的社会思想
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	発展と衰微	19	1970 41	教会論一般
J・F・ガレン	女性と霊性	19	1970 42～49	霊性神学
J・バートネス	苦しみの積極的意味	19	1970 50～55	信仰生活
Y・コンガール	人間 —この呼ばれている存在—	19	1970 56～60	神学的人間論
I・ベック	神の民の祭司職	19	1970 61～67	信徒使徒職
X・レオン・デュフール	聖書学者に期待されるもの	19	1970 68～77	聖書釈義学
井上洋治	〈巻頭言〉未来の「日本の神学」への期待	20	1970 2～7	巻頭言
B・ロナガン	神学と人間の未来	20	1970 8～17	ロナガン
G・ボウム	二千年代の教会はどうなる? —教会は一つの社会ではなく、動きである—	20	1970 18～25	教会論一般
R・マクブライエン	エキュメニズムのゆくえ	20	1970 26～32	エキュメニズム
Y・モルトマン	福音の新しい解釈をめざして	20	1970 33～37	新約聖書神学
J・W・グレーザー	大罪によって恩恵はなくなるか	20	1970 38～41	罪
G・フォーラー	旧約聖書の中心点は何か	20	1970 42～48	旧約聖書神学
P・シムソン	「神の都」のドラマ —ルカ福音書のエルサレム物語—	20	1970 49～58	ルカ
D・ミラー	なぜ神は人となったか	20	1970 59～67	ヘブライ書
K・ラーナー	待降節の訪れ	20	1970 68～72	神学的エッセイ
J=L・モレイ	〈巻頭言〉性の人間化	21	1971 2～3	巻頭言
C・ムーニー	現代世界憲章と神学の未来	21	1971 4～14	現代世界憲章
A・ブレ	独身生活の情緒的欠陥はどう補われるか	21	1971 15～23	修道生活
A・プレ	人間の性行為	21	1971 24～25	性倫理
M・ジョイス	貞潔は性の自由をもたらすか	21	1971 26～31	修道生活
J・ギエ	イエス・キリストの純潔	21	1971 32～41	キリスト論
L・ボーステン	聖書のしおり(1)正しい祈りとは	21	1971 41	信仰生活
M・マサール	福音の宣教は今日でも意味があるか	21	1971 42～47	福音宣教
G・クヴァール	聖書と聖伝	21	1971 48～57	聖書と伝承
K・ラーナー	復活祭の喜び	21	1971 58～63	神学的エッセイ
I・de ラ・ポトリ	人の子は上げられる	21	1971 64～73	キリスト論
M・ディベリウス	初めに永遠のみことばがあった	21	1971 74～76	ヨハネ
L・アルンプルスター	〈巻頭言〉修道生活のゆくえ	22	1971 2～5	巻頭言
A・ラーキン	修道生活に関する聖書的・神学的側面	22	1971 6～18	修道生活
D・ベルトラン	完全さは修道者の専売特許か	22	1971 19～25	修道生活
R・ヴォワイヨーム	現代人と観想	22	1971 26～33	信仰生活
F・ヘングスバハ	教会内での信徒の位置	22	1971 34～40	教会論一般
『キャソリック・マインド』	教会の共同責任性	22	1971 41～43	教会論一般
F・バクレイ	共同典礼参加の原則	22	1971 44～54	典礼神学
P・テイヤール・ド・シャルダン	諸宗教の合流	22	1971 55～61	諸宗教の神学
H・コックス	信仰の新たな可能性	22	1971 62～69	信仰
L・ボーステン	聖書のしおり(2)是非すべからず	22	1971 70～71	信仰生活
K・ラーナー	生ける死者の日に	22	1971 72～77	神学的エッセイ
薄田昇	〈巻頭言〉骨より肉を	23	1971 2～3	巻頭言
R・シュールマン	道の大家、マイスター・エックハルト	23	1971 4～12	中世思想
M・エックハルト	みことばを宣べ伝えなさい	23	1971 13～16	原典資料

総目録

B・フレニョ・ジュリアン	三位一体の神秘	23	1971 17～25	三位一体論
H・ド・リュバック	危機の渦中にある教会	23	1971 26～36	教会論一般
Y・コンガール	宣教の必要性	23	1971 37～43	福音宣教
L・ボーステン	聖書のしおり(3)信じること	23	1971 44～45	信仰生活
P・ド・シュルジ	福音と暴力	23	1971 46～56	新約聖書神学
A・フォンセカ	ガンジーと非暴力	23	1971 57～60	エッセイ
G・バウムバハ	イエスとファリサイ人	23	1971 61～69	キリスト論
X・レオン・デュフル	復活したイエスの現存	23	1971 70～78	復活
濱尾文郎	〈巻頭言〉神の教会	24	1971 2～3	巻頭言
M・レーラー	討論資料として — キュンク著『質問—誤りえないか』評—	24	1971 4～13	教導職
K・ラーナー	ハンス・キュング批判	24	1971 14～20	教導職
K・ラーナー	カトリック神学における不可謬性	24	1971 21～27	教導職
ドイツ司教団	啓示と教義と信仰	24	1971 28～29	教導職
H・キュンク	なぜ私は教会にとどまっているか	24	1971 30～35	教導職
L・ボーステン	聖書のしおり(4)私にとってキリストとはだれか	24	1971 36～37	信仰生活
J・ボレマン	ルカ福音のカテケシスにおける聖霊	24	1971 38～48	ルカ
H・シュリーア	時の終わり	24	1971 49～56	終末論
C・ベルナル	召命の理念	24	1971 57～68	召命
G・—M・ベラー	エレミヤの召命の危機	24	1971 69～78	エレミヤ
林省吾	〈巻頭言〉経験	25	1972 2～3	巻頭言
W・ライヒ／L・ファーラー	無効な婚姻をいやす道	25	1972 4～16	婚姻
C・デュコク	今日の結婚	25	1972 17～25	婚姻
W・バセット	離婚と再婚	25	1972 26～35	婚姻
L・ボーステン	聖書のしおり(5)復活	25	1972 36～37	信仰生活
E・スキレベークス	キリスト教の死生観	25	1972 38～41	終末論
J・オニール	イエスの沈黙	25	1972 42～46	キリスト論
H・U・v・バルタザール	なぜ私はキリスト者なのか	25	1972 47～52	信仰
J・ラッツィンガー	なぜ私は教会にとどまるのか	25	1972 53～57	信仰
J・ラッツィンガー	司祭の役務	25	1972 58～63	司祭職
K・ラーナー	主の現れ	25	1972 64～69	神学的エッセイ
J・カファレナ	神概念の吟味	25	1972 70～77	神概念
柳瀬睦男	〈巻頭言〉学問・言語・神	26	1972 2～3	巻頭言
B・ロナガン	現代こそ信頼が	26	1972 4～13	ロナガン
K・リーゼンフーバー	キリスト論の基礎的考察 — ラーナーのキリスト論—	26	1972 14～21	キリスト論
K・ラーナー	キリストの心	26	1972 22～26	神学的エッセイ
Y・コンガール	告解の秘跡に関する教えと司牧	26	1972 27～37	ゆるし
P・リガ	告解とミサ	26	1972 38～44	ゆるし
M・テュリアン	新しい奉獻文の神学	26	1972 45～58	典礼神学
W・カスパー	現代における神体験の可能性	26	1972 59～71	神体験
L・ボーステン	聖書のしおり(6)不正なマンモン	26	1972 72～73	信仰生活
P・ショーネンベルク	啓示と経験	26	1972 74～80	啓示
I・マルティーニ	〈巻頭言〉無題	27	1972 2～4	巻頭言
E・シャラート	なぜ司祭職を放棄するのか	27	1972 6～22	司祭職

H・シュリーア	新約聖書における司祭職	27	1972 23～30	司祭職
M・ファン・カスター	激動する現代世界の司祭	27	1972 31～45	司祭職
S・リヨネ	新約聖書と原罪	27	1972 46～52	原罪
D・スタンリー	救いといやし	27	1972 53～65	奇跡
E・リドー	テイヤール・ド・シャルダンによる「性」	27	1972 66～76	テイヤール・ド・シャルダン
奥村一郎	〈巻頭言〉ゼロの視点	28	1972 2～3	巻頭言
K・ラーナー	キリスト教の新しい基本的信条	28	1972 4～14	教義
K・ラーナー	現代世界観におけるキリスト論	28	1972 15～23	キリスト論
J・カファレナ	現代のキリスト教	28	1972 24～31	信仰
R・マルレ	解釈学とカテキシス	28	1972 32～36	カテキズム
J・ラッツィンガー	信仰のキリストとユーカリスト	28	1972 37	神学的エッセイ
M・ファン・カスター	イエス・キリストへの信仰	28	1972 38～46	信仰
J・モワン	歴史的確実性と信仰	28	1972 47～58	信仰
聖公会／カトリック委員会	ユーカリストの教理についての合意声明	28	1972 60～66	聖体
聖公会／カトリック委員会	合意声明とキリスト教的一致	28	1972 67～70	エキュメニズム
A・ライダー／B・バイロン	合意声明をめぐって —解説と論評—	28	1972 71～78	エキュメニズム
瀬戸勝介	〈巻頭言〉たゆみない祈り	29	1973 2～3	巻頭言
K・ラーナー	祈りについて	29	1973 4～14	祈り
P・ホッキン	祈りの分かち合い	29	1973 15～23	祈り
J・マッケンジー	救いの意味	29	1973 24～32	救済論
F・ヴルフ	われわれの真ん中に立つイエス・キリスト	29	1973 33～38	キリスト論
X・レオン・デュフォル	聖書解釈学者と歴史的出来事	29	1973 39～47	聖書釈義学
M・ケール	教会にいる喜び	29	1973 48～55	教会論一般
A・G・モリナ	教会の世論はやかましいドラカ	29	1973 56～63	教導職
E・スキレベークス	新しい司祭像の神学的考察	29	1973 64～73	司祭職
J・カファレナ	イエス・キリスト —真の人・真の神—	29	1973 74～80	キリスト論
K・ライフ	〈巻頭言〉ペンテコステより離散教会へ	30	1973 2～3	巻頭言
堀田雄康	ヨハネの「ロゴス」とパウロの「神の像」	30	1973 4～19	キリスト論
J・ラッツィンガー	実体変化をめぐって —聖体の意味を問う—	30	1973 32～39	聖体
F・シュタインメッツ	ふさわしい主の晩餐とは	30	1973 40～42	聖体
E・ダスマン	「キリストの体—アーメン」	30	1973 43～47	聖体
J・カファレナ	信仰について	30	1973 48～55	信仰
宋 正孝	みことばの随想	30	1973 56～58	エッセイ
A・ダレス	宣教神学の動向	30	1973 60～70	福音宣教
A・ダレス	啓示の考え方とその変遷	30	1973 71～79	啓示
杉田稔	〈巻頭言〉ミシェル・クオストに倣っての祈り	31	1973 2～3	巻頭言
B・ヘーリング	世俗化時代の祈り	31	1973 4～12	祈り
J・カファレナ	〈続〉信仰について	31	1973 13～15	信仰
H・シュリーア	ヨハネ福音書におけるキリスト論	31	1973 16～27	ヨハネ
R・ヴァイヤー	「聖書のみ」か	31	1973 28～37	マルティン・ルター
J・クイーン	新約聖書における奉仕職	31	1973 38～47	司祭職
R・シュナッケンブルク	ペトロと他の使徒との関係	31	1973 48～55	位階制
W・カスパー	教会における司祭の役割	31	1973 56～67	司祭職

J・ラッツィンガー	司祭職の意義	31	1973 68～80	司祭職
A・マタイス	〈巻頭言〉愛の建設	32	1973 2～3	巻頭言
N・ローフィンク	イスラエルとユダの一致	32	1973 4～8	旧約聖書神学
W・ブルガー	教会一致の可能性	32	1973 9～15	エキュメニズム
L・A・シェーケル	あがないは連帯性を表す	32	1973 16～24	聖書神学一般
K・シェルクレ	新約聖書における報いと罰	32	1973 25～30	罪
J・カファレナ	体験と表現	32	1973 31～39	信仰
M・ケール	希望の物語 ―クリスマスに―	32	1973 40～43	神学的エッセイ
J・マッケンジー	インマヌエル	32	1973 44～49	旧約聖書神学
P・ベルナディケー	ルカにおける喜びの神学	32	1973 50～66	ルカ
R・シュルテ	神を父と呼ぶ	32	1973 67	神学的エッセイ
D・ドース	アバ、父よ	32	1973 68～74	キリスト論
O・ブルック	三位一体の影響	32	1973 75～78	三位一体論
安井光雄	〈巻頭言〉神学と教会法学の対話	33	1974 2～3	巻頭言
L・エルシ	教会における法	33	1974 4～9	教会法
R・E・ブラウン	未熟さは婚姻障害となるか	33	1974 10～15	教会法
P・パーマー	キリスト教的結婚	33	1974 16～26	婚姻
J・レアル	イエスの母がいた	33	1974 27～31	マリア論
J・ブライ	しるしと奇跡	33	1974 32～39	奇跡
Z・アルセギ／M・フリック	原罪 ―トレント公会議の真意―	33	1974 40～51	原罪
L・ジョンストン	肉と霊	33	1974 52～59	新約聖書神学
J・オルルク	ローマ書のピステイス	33	1974 60～66	ローマ書
F・キーン	多様性の神学 ―ラーナーの思想と修道生活―	33	1974 67～80	諸宗教の神学
H・クルーゼ	〈巻頭言〉新しい司祭像をめぐる	34	1974 2～4	巻頭言
パウロ六世	ラテン教会に修身助祭を復興させるための一般規則	34	1974 5～12	助祭職
E・エクリン	助祭職の神学的領域	34	1974 13～21	助祭職
J・リース	新約聖書における奉仕職のあり方 ―終身助祭職の役割をめぐる―	34	1974 22～29	助祭職
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	世界各地における助祭職の現状	34	1974 30～38	助祭職
K・シャッツ	カリスマと相対性	34	1974 39～43	聖霊
H・キュンク	神の言葉と霊のきずな	34	1974 44～46	聖霊
J・ラッツィンガー	神の民の指導者	34	1974 47～53	司祭職
H・U・v・バルタザール	新約聖書における司祭像	34	1974 54～60	司祭職
W・ヨーマンズ	信仰による祈り	34	1974 61～68	信仰生活
X・レオン・デュフォル	人間は死後どうなるか	34	1974 69～80	終末論
中垣純	〈巻頭言〉福音宣教に思う	35	1974 2～4	巻頭言
H・ミューレン	堅信の秘跡	35	1974 5～13	堅信
A・ガーノーチ	感謝の祭儀	35	1974 14～26	ミサ
H・マイヤー	回心の祭儀	35	1974 27～31	ゆるし
P・パーマー	病者の塗油	35	1974 32～41	病者の塗油
L・J・スーネンス	明日の教会〈第一回〉	35	1974 42～51	教会論一般
H・スミス	多忙な人の静寂の祈り	35	1974 52～59	祈り
M・ニーデンタル	福音のアイロニーとは	35	1974 60～68	新約聖書神学
K・シェルクレ	希望	35	1974 69～79	終末論

総目録

J・ソレ	〈巻頭言〉神愛と隣人愛 —U・ルスに従って—	36	1974 2~3	巻頭言
L・ーJ・スーネンス	明日の教会〈第二回〉	36	1974 4~13	教会論一般
J・エレミアス	イエスの生涯と初代教会における祈り	36	1974 14~23	典礼史
F・ハーン	新約聖書と初代教会にみる宣教	36	1974 24~37	福音宣教
R・マルレ	現代人の信仰告白を試みて	36	1974 38~48	教義
J・カファレナ	救い主	36	1974 49~56	キリスト論
H・マンデルス	誰が典礼の主体か	36	1974 57~62	典礼神学
P・グルロ	聖書への三つの問い	36	1974 63~69	旧約聖書神学
J・ゲルハルト	教会基本法は必要か	36	1974 70~79	教会法
A・G・エバンヘリスタ	〈巻頭言〉私の修道生活の意味	37	1975 2~3	巻頭言
C・チェリアン	いま、私の目で神を見る —宗教体験の記録としての聖書—	37	1975 4~13	神体験
W・コナリー	長所を生かす霊的指導	37	1975 14~17	霊的指導
G・アシエンブレンナー	意識の糾明	37	1975 18~27	イエズス会霊性
P・シュンゲル	イエスの死	37	1975 28~35	キリスト論
Y・コンガール	働く聖霊	37	1975 36~47	聖霊
N・アベヤシंगा	回心の秘跡と聖霊	37	1975 48~54	ゆるし
H・キュンク	洗礼の完成としての堅信の秘跡	37	1975 55~67	堅信
J・ウィナンディ	最後の審判の情景	37	1975 68~79	終末論
T・オーブォンク	〈巻頭言〉「心を込めて神を仰ぎ」	38	1975 2~4	巻頭言
G・カールソン	死から命へ —霊的指導と過越の神秘—	38	1975 5~15	霊的指導
J・ドミニアン	独身生活と共同体	38	1975 16~23	修道生活
K・ラーナー	信仰の核心は生の中軸	38	1975 24~33	信仰
P・ホッキン	キリスト者はどう祈るか	38	1975 34~41	祈り
T・デュベイ	黙想の諸形質とその問題	38	1975 42~53	祈り
J・リース	セレブレーションと宣教	38	1975 54~61	福音宣教
G・ソレアス・プラグ	福音書は歴史的か	38	1975 62~69	聖書釈義学
R・ペロディ	罪の意識と赦し	38	1975 70~79	ゆるし
景山あき子	〈巻頭言〉聖霊とともに	39	1975 2~3	巻頭言
W・ヘルプストリート	リジューのテレーズにおける〈とりなし〉と〈連帯〉	39	1975 4~11	霊性一般
J・ギエ	イエスの死苦と人間	39	1975 12~19	キリスト論
R・バウマン	イエスの復活とは何をいうのか	39	1975 20~31	復活
K・ラーナー	復活信仰の霊性をめぐって	39	1975 32~41	復活
J・カファレナ	キリストの神秘	39	1975 42~49	キリスト論
D・ハスキ	啓示の継続	39	1975 50~55	啓示
K・ラーナー	教会の使命は世界を人間らしくすることか	39	1975 56~62	教会論一般
G・ラップ	宗教的多様性とその課題	39	1975 63~67	諸宗教の神学
H・ラヴァレット	性と政治	39	1975 68~80	倫理神学一般
白柳誠一	〈巻頭言〉適切な表現と提示方法	40	1976 2~3	巻頭言
K・ラーナー	病者の自由 —その神学的考察—	40	1976 8~18	生命倫理
C・サイクス	テイヤール・ド・シャルダンと宇宙的キリスト	40	1976 19~25	テイヤール・ド・シャルダン
H・ヌーウェン	歓待のすすめ —ホスピタリティーとキリスト者—	40	1976 26~29	司牧
B・エリソンド	聖書に学ぶ福音宣教	40	1976 30~40	福音宣教
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈1〉	40	1976 41~49	復活

総目録

L・サブラン	イエスの奇跡	40	1976 50～58	奇跡
R・コスト	マルクス主義とキリスト者の生活	40	1976 59～65	キリスト教とマルクス主義
J・マーティン	マタイにおける教会	40	1976 66～74	教会論一般
山本襄治	〈巻頭言〉神学と司牧	41	1976 2～3	巻頭言
G・ローフィンク	死後、何が到来するか	41	1976 4～15	終末論
L・ケーシー	安楽死の倫理 —カレン・クインランの場合—	41	1976 16～21	生命倫理
B・バトラー	新約聖書のマリア	41	1976 22～31	マリア論
M・ーD・シュニユ	労働のキリスト教的意味	41	1976 32～45	キリスト教的社會思想
J・フットレル	創立者のカリスマ発見	41	1976 46～53	修道生活
A・ロツェッター	フランシスコの現代への示唆	41	1976 54～59	靈性一般
J・ティヤール	変革が必要な修道生活	41	1976 60～74	修道生活
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈2〉	41	1976 75～78	復活
早副稔	〈巻頭言〉自らの信仰体験を整理して語れるものを持ちたい	42	1977 2～3	巻頭言
J・ラッツインガー	洗礼と信仰および教会所属	42	1977 4～17	洗礼
J・G・ソボサン	神秘主義の道	42	1977 18～24	神秘主義
H・スタッファー	改宗者は靈的独自性を捨てるのか —アジアの伝統的宗教とカトリックとの関係—	42	1977 25～30	諸宗教の神学
H=J・クラウス	捕囚帰還後の律法理解	42	1977 31～44	旧約聖書神学
C・P・マイヤー	神とその「可視性」 —神学における神体験と神認識について—	42	1977 45～51	神概念
J・M・ロビラ	今日の〈赦しの秘跡〉	42	1977 52～61	ゆるし
D・ディドベール／P・M・ベールネール	イエスはガリラヤにきた —マルコ1章21～45の解釈—	42	1977 62～68	マルコ
J・デュボン	至福について	42	1977 69～79	新約聖書神学
高柳俊一	〈巻頭言〉神学の未来？	43	1977 2～3	巻頭言
Y・コンガール	教導職と神学者	43	1977 4～11	教導職
J・カーモディ	カトリック神学の今後の課題	43	1977 12～21	諸宗教の神学
西独カトリック教会会議	われわれの希望 —現代の信仰告白—	43	1977 22～36	教会論一般
K・ヘンメルレ	宣教の火を消すな	43	1977 37～41	福音宣教
W・カスパー	伝承と自由	43	1977 42～46	聖書と伝承
M・ウォルシュ	聴けイスラエル(申命記 その1)	43	1977 47～51	申命記
C・J・パイファー	刷新の青写真(申命記 その2)	43	1977 52～57	申命記
L・ドゥーハン	イエスと祈り	43	1977 58～63	祈り
D・ヒル	I ペトロ書における苦しみと洗礼	43	1977 64～71	I ペトロ書
J・M・ティヤール	信仰に生きる修道者	43	1977 72～80	修道生活
赤波江春海	〈巻頭言〉道—真理—命	44	1978 2～3	巻頭言
P・アルペ	飢餓と福音宣教	44	1978 4～15	福音宣教
W・カスパー	「神の子」の理解について	44	1978 16～28	神の子
Y・ラガン	祈りの技術	44	1978 29～35	祈り
P・G・ファン・ブレーメン	受容を受け入れる勇氣	44	1978 36～40	信仰生活
K・ラーナー	熱狂と修道者	44	1978 41～43	聖靈
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(1)	44	1978 44～54	聖靈
J・アルファロ	死とキリスト教的希望	44	1978 55～65	終末論
R・F・コリンズ	イエスとニコデモとの会話	44	1978 66～73	新約聖書神学
I・de ラ・ポトリ	真理を行う	44	1978 74～80	新約聖書神学
押田成人	〈巻頭言〉安物買いのぜに失い	45	1978 2～3	巻頭言

総目録

Z・アルセギ	ゆるしの祭儀の刷新	45	1978 4～10	ゆるし
J・モルトマン	三一的神の歴史	45	1978 11～23	三位一体論
L・A・シケル	イヨブ記を戯曲的に読むために	45	1978 24～35	ヨブ
P・ベルナディーク	ルカ福音書における旅行記の霊性	45	1978 36～46	ルカ
K・シエルクレ	ヨハネス福音書における教会	45	1978 47～53	ヨハネ
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(2)	45	1978 54～62	聖霊
J・スードブラック	患難のうちにも誇る	45	1978 63～71	信仰生活
J・M・カスティリヨ	社会と霊的生活のずれ	45	1978 72～79	霊性神学
渡辺和子	〈巻頭言〉「君は君、我は我なり、されど仲良き」	46	1979 2～3	巻頭言
H・ミューレン	マリア論の新しい動向	46	1979 4～11	マリア論
W・バイナート	今日のマリア崇敬	46	1979 12～24	マリア論
C・フォカン	マルコス福音書における弟子たちの盲目性	46	1979 25～29	マルコ
M・A・ゲッティ	ローマ書における使徒パウロス —今日の教会へのメッセージ—	46	1979 30～36	ローマ書
F・ムスナー	「ガリラヤ危機」というものはあったか	46	1979 37～46	キリスト論
J・ツインク	門	46	1979 47	エッセイ
J・ギエ	イエス・キリストの中になされた経験	46	1979 48～54	キリスト論
V・コディナ	場末に息づく信仰	46	1979 55～61	神学的エッセイ
H・ゲルツ	テロリズムの原因	46	1979 62～64	キリスト教的社会思想
J・パスキエ	体験と回心	46	1979 65～72	信仰生活
J・M・カスティリヨ	新しい奉仕職の確立	46	1979 73～78	教会論一般
三好迪	〈巻頭言〉聖書研究と教理神学	47	1979 2～3	巻頭言
D・シニア	イエスとはだれか —現代キリスト論の課題—	47	1979 4～15	キリスト論
W・ケルン	「共に食事すること」	47	1979 16～23	キリスト論
G・ローフィンク	神学における「物語り」 —福音書の言語上の基本構造—	47	1979 24～35	新約聖書神学
K・ラーナー	意味への問い —神の全き秘義に人生の意味を問う—	47	1979 36～43	神学的エッセイ
K・ヘムメルレ	忙しさとクリスマス	47	1979 44～46	エッセイ
N・ローフィンク	安息と余暇	47	1979 47～58	旧約聖書神学
P・ヒューナーマン	イエスの力と無力	47	1979 59～65	キリスト論
I・de ラ・ボトリ	イエスとサマリア人	47	1979 66～79	ヨハネ
和田幹男	〈巻頭言〉日本のカトリック神学を考える	48	1980 2～3	巻頭言
プエブラ司教会議	福音宣教	48	1980 4～11	福音宣教
O・v・ネル・プロイニング	世界に対する教会の使命	48	1980 12～25	教会論一般
S・ガリレア	解放の神学	48	1980 26～48	解放の神学
R・ペツシュ	ペトロスによるメシア告白	48	1980 49～56	マルコ
G・オーコリンズ	イエスは自らの死をどのように理解したか	48	1980 57～68	キリスト論
U・ヴィルケンス	聖餐と教会一致	48	1980 69～86	エキュメニズム
J・マクポリン	ルカとヨハネスにおける聖霊	48	1980 87～104	聖霊
K・シェーファー	祈りの意味	48	1980 105～112	祈り
池長潤	〈巻頭言〉源泉としての信仰体験	49	1980 2～3	巻頭言
G・グレースハーケ	神の愛に召されている人間	49	1980 4～24	三位一体論
O・H・ペツシュ	死と信仰	49	1980 25～48	終末論
G・スヴィテク	共同体の霊動弁別	49	1980 49～60	イエズス会霊性
R・ローランタン	「カリスマ」とは何か	49	1980 61～71	聖霊

総目録

P・シュミッツ	良心 —危機に立たされる倫理規範—	49	1980 72~85	倫理神学一般
J・ボイトラー	新約聖書による霊的指導	49	1980 86~98	霊的指導
W・ヴォーゲルス	「構造分析」と司牧 —ザカイオスの物語—	49	1980 99~112	聖書釈義学
白柳誠一	〈巻頭言〉真理に仕える使命	50	1981 2~3	巻頭言
P・アルペ	〈巻頭言〉愛と正義	50	1981 4~9	巻頭言
J・ピタウ	〈巻頭言〉日本への巡礼	50	1981 10~11	巻頭言
越前喜六	〈巻頭言〉神学の日本化を目指して	50	1981 12~13	巻頭言
M・トーレス=アルピ	〈巻頭言〉牧者なる主の声	50	1981 14~16	巻頭言
熊沢義宣	エキュメニズムに関する二、三の考察	50	1981 17~19	エキュメニズム
J・モルトマン	不安の時代におけるキリスト	50	1981 20~34	終末論
P・ヒューナーマン	教会と聖職	50	1981 35~49	位階制
R・ブーシェー	「明日の司教とは」	50	1981 50~61	司教職
J・P・ハイル	マタイオス福音書における癒しの奇跡	50	1981 62~77	マタイ
J・ボーツ／P・D・フリース	霊的指導を与えるときの原則	50	1981 78~79	霊的指導
J・ダルク	賛美のいけにえ	50	1981 80~85	祈り
M・サイモン	礼拝のための空間づくり	50	1981 86~98	司牧
山本襄治	〈巻頭言〉神学する心	51	1981 2~3	巻頭言
K・ラーナー	「世界の教会」への飛躍	51	1981 4~15	教会論一般
H・U・v・バルタザール	とらえがたきものに頼る	51	1981 16~32	信仰
A・ジョルジュ	救い主の誕生 —ルカスによる誕生物語の研究—	51	1981 33~50	ルカ
D・バール	ドラマとしてのマタイオス福音書 —その構造と意図の再考察—	51	1981 51~60	マタイ
C・ラッシュ／G・ルヴェーク／L・デュポン	ヨハネス20章の構造	51	1981 61~76	ヨハネ
J・ラムブレヒト	共観福音書における〈たとえ話〉	51	1981 77~92	新約聖書神学
J・ラッツィンガー	肉体の復活	51	1981 93~109	終末論
粟本昭夫	〈巻頭言〉日本の教育とキリスト教神学	52	1982 2~3	巻頭言
J・ソプリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(前半)	52	1982 4~27	キリスト論
C・バンベルク	現代人と礼拝	52	1982 28~41	典礼神学
L・A・シェーケル	回心の典礼 —詩編50と51に見る	52	1982 42~49	詩編
H・U・v・バルタザール	新約聖書から見た召命	52	1982 50~60	召命
H・ロッター	救いと性の倫理	52	1982 61~73	性倫理
G・オホマニー	秘跡・典礼の新しい理解 —洗礼・ゆるし・病者の塗油の秘跡をめぐって	52	1982 74~84	洗礼
M・T・ウィンスタンリー	弟子の道と孤独 —マルコス福音書を黙想して—	52	1982 85~94	受難
K・ラーナー	イエスの復活	52	1982 95~112	復活
赤木善光	〈巻頭言〉典礼への関心	53	1982 2~4	巻頭言
J・ソプリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(後半)	53	1982 5~24	キリスト論
T・キーティング	集中の祈り	53	1982 25~33	祈り
E・ウッドワード	修道生活と憂鬱症	53	1982 34~68	修道生活
H・U・v・バルタザール	少年の召命	53	1982 69~71	召命
L・A・シェーケル	神の不在 —詩編42・43の詩的構造—	53	1982 72~81	詩編
N・ローフィンク	「生めよ、ふえよ、地を従わせよ」?	53	1982 82~100	旧約聖書神学
J・ホホワイトヘッド	「今の時をよく用いなさい」	53	1982 101~103	信仰生活
P・スラルダース	創造	53	1982 104~112	サクラメントウム・ムンディ
宇佐美公史	〈巻頭言〉波のはざままで	54	1983 2~5	巻頭言

J・モルトマン	テレジアとルター	54	1983 6～25	マルティン・ルター
P・ジェルヴェ	ゆるしの秘跡	54	1983 26～45	ゆるし
W・ケルン	キリスト者は保守的か	54	1983 46～61	キリスト論
M・A・シュヴァリエ	聖霊の降臨 —ルカスとヨハネスにおいて—	54	1983 62～71	聖霊
K・ドノヴァン	典礼の逆説	54	1983 72～78	典礼一般
G・マルク	カトリック教会の未来(一)	54	1983 79～102	教会論一般
K・ラーナー	原罪	54	1983 103～112	原罪
徳善義和	〈巻頭言〉賞讃と忘却のはざまのルター	55	1983 2～4	巻頭言
K・ラーナー	霊の体験	55	1983 5～23	神体験
M・スコット	預言者エリヤと神の出会い	55	1983 24～29	修道生活
F・ロンバルディ	核エネルギーの倫理的次元	55	1983 30～35	社会倫理
W・クラフト	マスターベーション・性の考察	55	1983 36～45	性倫理
H・ワンズブラ	聖書における平和	55	1983 46～53	聖書神学一般
G・オマホーニ	死後への不安と願望	55	1983 54～62	終末論
S・M・シュナイダース	ヨハネス福音書と女性像	55	1983 63～81	ヨハネ
G・マルク	カトリック教会の未来(二) —教会が直面する七つの挑戦—	55	1983 82～99	教会論一般
K・ラーナー	あがない	55	1983 100～112	サクラメントウム・ムンディ
沢田和夫	〈巻頭言〉一致志向の霊性	56	1984 2～4	巻頭言
E・スキレバークス	核非武装論 —平和の福音を生きる—	56	1984 5～16	信仰生活
F・ドレフェス	神のことばに仕える教会	56	1984 17～28	聖書釈義学
F・ドレフェス	神のことばの現実化	56	1984 29～42	聖書釈義学
R・ガスペリス	神のことばを祈る	56	1984 43～54	聖書釈義学
W・ウォーカー	ヨハネスによる「主の祈り」?	56	1984 54～66	新約聖書神学
H・ファイフェル	ホスピス —死は人間性の破壊か—	56	1984 67～72	司牧
W・レーザー	ルター像の変遷	56	1984 73～84	マルティン・ルター
J・ブロセーダー	新しい出会い〈カトリックのルター受容〉	56	1984 85～94	マルティン・ルター
堀江節郎	新しい神学	56	1984 95～96	神学的エッセイ
H・J・ポットマイヤー	信徒による司牧的奉仕	56	1984 97～104	信徒使徒職
E・ニールマン	司祭	56	1984 105～111	司祭職
百瀬文晃	〈巻頭言〉教会への奉仕としての神学	57	1984 2～4	巻頭言
岩島忠彦	カール・ラーナー —人と思想—	57	1984 5～14	カール・ラーナー
K・ラーナー	〈神秘〉概念の再吟味	57	1984 15～41	基礎神学一般
K・ラーナー	三位一体に関する考察	57	1984 42～60	三位一体論
K・ラーナー	イエスの人性について	57	1984 61～72	キリスト論
J・B・メッツ	カール・ラーナー —ひとつの神学的生涯—	57	1984 73～86	カール・ラーナー
K・ラーナー	日常に生きる永遠 —カール・ラーナー抜粋集—	57	1984 87～114	カール・ラーナー
K・ラーナー	死	57	1984 115～121	サクラメントウム・ムンディ
神学ダイジェスト編集室	カール・ラーナー主要文献リスト(邦語)	57	1984 122～128	カール・ラーナー
森一弘	〈巻頭言〉よろこびのこだまとしての福音宣教	58	1985 2～4	巻頭言
J・モルトマン	父なる神を信ず—神についての家父長的話法か、非家父長的話法か—	58	1985 5～16	フェミニスト神学
J・ラッツィンガー	解放の神学批判	58	1985 17～26	解放の神学
J・セグンド	解放の神学に見る二つの流れ	58	1985 27～37	解放の神学
P・デーゼラース	民の癒し手、ヤーウェ —トビア書に見る聖書の救済論—	58	1985 38～47	トビト記

総目録

J・フィッツ	モーセ、今求められる指導者像	58	1985 48～50	神学的エッセイ
J・F・オグレイディ	主に愛された弟子	58	1985 51～60	ヨハネ
C・E・カラン	規範的倫理から司牧的配慮へ	58	1985 61～74	司牧
J・パリシ／R・クランフォード	脳死—生と死のはざま—	58	1985 75～85	生命倫理
H・ロッター	教会法の枠組みと再婚の現実	58	1985 86～94	婚姻
J・シュヴァルツ	聖座の外交関係	58	1985 95～103	教皇庁関係
フュークリスター	過越し	58	1985 104～112	サクラメントウム・ムンディ
橋口倫介	〈巻頭言〉福音の文化的受容への期待	59	1985 2～4	巻頭言
A・ダレス	カトリシズムの本質 —プロテスタントとカトリックの観点をめぐって—	59	1985 5～25	カトリシズム
W・カスパー	救いの普遍的秘跡たる教会	59	1985 26～44	教会論一般
M・デュメ	信仰と文化との出会い	59	1985 45～56	インカルチュレーション
J・R・ダナヒュー	平和の福音 —ルカ福音書釈義—	59	1985 57～68	ルカ
W・ヴォーゲルス	ヨブの霊的成長	59	1985 69～76	ヨブ
M・J・バックレー	弱さを身に負うがゆえに	59	1985 77～83	司祭職
N・ローフィンク	世における正義と司祭職	59	1985 84～98	司祭職
F・レンツェンダイス	福音書という文学	59	1985 99～107	聖書釈義学
W・プロイニング	聖徒の交わり	59	1985 108～112	サクラメントウム・ムンディ
犬飼道子	〈巻頭言〉信徒使徒職 —一、二の考察—	60	1986 2～4	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの非暴力要求	60	1986 5～23	マタイ
A・ニコラス	聖書の読み方と祈り	60	1986 24～40	聖書神学一般
宇佐美公史	今日聖書をいかに読むか	60	1986 41～50	聖書神学一般
C・マルティーニ	最初の弟子たち	60	1986 51～55	祈り
M・P・ギャラガー	「教会離れ」と司牧の実践	60	1986 56～65	司牧
E・A・ディードリック	典礼改革に見る聖体の秘跡	60	1986 66～81	聖体
T・A・ケイン	精神療法 —心のいやし—	60	1986 82～89	司牧
K・シューベルト	イエスの復活 —そのユダヤ教的観点—	60	1986 90～101	復活
E・ニールマン	信徒	60	1986 102～108	サクラメントウム・ムンディ
F・アリンゼ	〈巻頭言〉諸宗教との対話の可能性を求めて	61	1986 2～6	巻頭言
K・シャッツ	公会議後の教会の危機	61	1986 7～18	教会論一般
M・アマラドス	対話は宣教と両立するか	61	1986 19～28	諸宗教の神学
P・ニッター	キリスト教は真にして絶対の宗教か	61	1986 39～51	諸宗教の神学
S・ドゥクルー	修道生活における対神関係	61	1986 52～62	修道生活
J・カヴァノー	資本主義文化とキリスト者	61	1986 63～72	信仰生活
R・マッコーミック	「生かすべきか、死なすべきか」	61	1986 73～83	生命倫理
J・オドネル	聖霊の神学 —イエスと霊—	61	1986 84～103	聖霊
K・ラーナー	キリストの再臨	61	1986 104～112	サクラメントウム・ムンディ
M・P・ギャラガー	〈巻頭言〉無神論の多様性を理解する	62	1987 2～4	巻頭言
J・フィッツマイヤー	キリストの昇天と聖霊降臨	62	1987 5～25	新約聖書神学
R・ロンマースキルヒ	最後の修道院	62	1987 26～35	修道生活
F・F・クラヴェール	教会と革命	62	1987 36～48	アジアの教会
R・プツァ	教会における再婚者の復権	62	1987 49～56	婚姻
K・ケリー	良心の成熟を目指して	62	1987 57～69	信仰生活
M・R・ソーズ	パウロの手紙における「神の義」	62	1987 70～79	パウロ神学

P・D・ハンソン	旧約聖書における戦争と平和	62	1987 80～99	旧約聖書神学
M・ゼックラー	啓蒙と啓示の相互依存	62	1987 100～106	啓示
R・シュルテ	秘跡(1)	62	1987 107～112	サクラメントウム・ムンディ
長島世津子	〈巻頭言〉教会と信徒の行方	63	1987 2～5	巻頭言
R・E・ブラウン	聖書的な祭司職の要請	63	1987 6～15	司祭職
C・デュコック	信仰の活動的な主体である信徒	63	1987 16～25	信徒使徒職
H・J・クラウク	役職のない共同体—ヨハネ文書における教会の経験	63	1987 26～48	教会論一般
G・キーレンケリイ	新約聖書における信徒の役割	63	1987 49～57	信徒使徒職
S・J・エマヌエル	アジアの教会における信徒	63	1987 58～72	アジアの教会
K・ラーナー	成熟したキリスト者とは	63	1987 73～84	信仰生活
カルメル会	心の旅 —捕らわれの記録—	63	1987 85～95	エッセイ
L・ギツリック	見えることと見えないこと	63	1987 96～104	祈り
R・シュルテ	秘跡(2)	63	1987 105～112	サクラメントウム・ムンディ
岸千年	〈巻頭言〉聖書を起点として	64	1988 2～6	巻頭言
J・H・ライト	教会 —聖霊の共同体—	64	1988 7～25	教会論一般
J・オコーリンズ	キリストの復活	64	1988 26～32	復活
K・H・シェルクレ	実存的解釈における非神話化	64	1988 33～43	聖書釈義学
F・リンチ	アナムカラ —一致の祈りと説教への招き—	64	1988 44～54	祈り
N・ローフィンク	神の治療処置である修道会	64	1988 55～67	修道生活
L・D・デイヴィス	この世の子らから学ぶ	64	1988 68～76	エッセイ
A・ジョーンズ	イスラム教 —キリスト教への挑戦—	64	1988 77～86	イスラム教
J・ダルリムプル	平和でなく剣を	64	1988 87～94	福音宣教
J・ズートブラック	ベタニアの兄妹たち	64	1988 95～103	祈り
H・フリース/J・フィンスタヘルツル	無謬性	64	1988 104～112	サクラメントウム・ムンディ
野間順子	〈巻頭言・全世界に行って〉ブルキナ・ファソの兄弟と共に生きる	65	1988 2～6	巻頭言
W・バイネールト	聖人 —キリストの救いの体現者—	65	1988 7～22	聖人
R・E・ブラウン	現代における聖書と教義の関係	65	1988 23～29	聖書釈義学
R・マーレイ	預言・政治・司祭職	65	1988 30～43	司祭職
W・カスパー	世界における信徒の使命	65	1988 44～58	信徒使徒職
A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅰ)	65	1988 59～74	教会論一般
O・v・ネル・ブロイニング	制度化された不正とは何か	65	1988 75～80	罪
I・カマーチョ	〈教会の社会教説〉を解釈するための四つの鍵	65	1988 81～96	キリスト教的社会思想
H・グロース	「主は豊かなあがないに満ち」	65	1988 97～105	旧約聖書神学
J・シュプレット	「肉体」と「霊魂」	65	1988 106～111	サクラメントウム・ムンディ
A・フェークトレ/I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅰ)	66	1989 100～111	サクラメントウム・ムンディ
K・リーゼンフーバー	〈巻頭言〉現代に神を語る	66	1989 2～5	巻頭言
J・ブエリエ	連帯する神の民	66	1989 6～22	旧約聖書神学
金 壽煥(キム・スファン)	聖体大会にむけて	66	1989 23～31	聖体
金 勝恵(キム・スンヘー)	解放とインカルチュレーション	66	1989 32～39	インカルチュレーション
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅰ)	66	1989 40～49	旧約聖書神学
T・E・クラーク	貧しい人々の側に立つ選択	66	1989 50～59	キリスト教的社会思想
L・S・ケーヘル	山上の説教の倫理的な意味	66	1989 60～69	倫理神学一般
A・ピエリス	解放の視点からみた霊性	66	1989 70～82	霊性神学

A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅱ)	66	1989 83~99	解放の神学
伊従直子	〈巻頭言〉「神の似姿」に創られ	67	1989 2~4	巻頭言
H・S=シュトラウマン	母なる神 —ホセア11章に表れた神のイメージ—	67	1989 5~20	ホセア
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅱ)	67	1989 21~31	新約聖書神学
R・ブレナン	民衆の神学とは	67	1989 32~40	民衆の神学
U・アダムス	社会の周辺から	67	1989 41~55	祈り
N・グライナツハー	離婚と再婚の問題	67	1989 56~65	婚姻
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅰ)	67	1989 66~82	諸宗教の神学
P・ワーグドルフ	祈りの手引き	67	1989 83~91	祈り
J・モルトマン	イエスと神の国	67	1989 92~105	神の国
A・フェークトレノ/イ・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅱ)	67	1989 106~112	サクラメントウム・ムンディ
雨宮慧	〈巻頭言〉求心的な動き	68	1990 2~4	巻頭言
J・オウデンネル	司祭のアイデンティティーと霊性	68	1990 5~16	司祭職
R・ヒューブナー	初代教会における執事・長老・監督職の起源	68	1990 17~35	位階制
M・ハルト	教皇制度と教会一致運動	68	1990 36~50	教皇職
J・I・ゴンザレス・ファウス	ペトロの誘惑	68	1990 51~61	祈り
S・パイナダス	真の解放 —観想と活動—	68	1990 62~75	祈り
J・J・ギル	イメージの召命論	68	1990 76~82	召命
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅱ)	68	1990 83~95	諸宗教の神学
J・モルトマン	キリストの復活と世界の希望	68	1990 96~106	復活
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅲ)	68	1990 107~112	サクラメントウム・ムンディ
佐藤敬一	〈巻頭言〉神様に喜んでいただくために	69	1990 2~5	巻頭言
P・H・コルベンバツハ	〈巻頭言〉二十五周年を祝って	69	1990 6~7	巻頭言
田淵文男	〈巻頭言〉『神学ダイジェスト』の四半世紀と若干の具体案	69	1990 8~10	巻頭言
J・B・メッツ	公会議 —「一つの手始めの手始め」?—	69	1990 11~22	教会論一般
岩島忠彦	イエスの姿を求めて	69	1990 23~41	キリスト論
P・M・ツレーナー	教会のヴィジョン	69	1990 42~50	教会論一般
N・ギルメット	聖パウロと女性	69	1990 51~63	パウロ神学
T・P・ローシュ	倫理の諸問題とエキュメニズム	69	1990 64~69	エキュメニズム
R・グラムリッヒ	「不偏心」とイスラム教	69	1990 70~77	イスラム教
M・サール	堅信を巡る現在の状況	69	1990 78~90	堅信
R・マレー	霊的友情	69	1990 91~105	霊性神学
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅳ)	69	1990 106~112	サクラメントウム・ムンディ
鈴木宣明	〈巻頭言〉イグナティウスの霊性の歴史体験	70	1991 2~5	霊性神学
A・デムステイエ	最初のイエズス会員たちと貧しい人々	70	1991 6~17	イエズス会霊性
J・ソブリノ	『霊操』におけるキリスト	70	1991 18~37	イエズス会霊性
M・ヘルヴィヒ	王たるキリストの招き	70	1991 37~44	イエズス会霊性
E・クンツ	神の愛に動かされて —イグナチオの霊操の神学的諸観点とイエズス会員の行動様式の特	70	1991 45~61	イエズス会霊性
R・J・シュライター	二十一世紀に向かう宣教	70	1991 62~72	福音宣教
A・ヴァイザー	病気をいやす賜物 —イエスと病人たち—	70	1991 73~81	新約聖書神学
H・シュペーマン	イエスの受難	70	1991 82~87	祈り
B・F・バット	眠っている神 —古代中近東の神話と聖書思想—	70	1991 88~105	旧約聖書神学
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅴ)	70	1991 106~112	サクラメントウム・ムンディ

総目録

岳野慶作	〈巻頭言〉『レーラム・ノヴァルム』発布百周年	71	1991 2~5	巻頭言
R・M・サンス・デ・ディエゴ	教会の社会教説 —百年と二十五年—	71	1991 6~19	キリスト教的社会思想
F・ルイス	十字架の聖ヨハネの霊性の主要側面	71	1991 20~29	霊性一般
R・キナスト	生活の場で行う霊操	71	1991 30~35	イエズス会霊性
S・クロイツァー	「母なる神」の再検討	71	1991 36~44	旧約聖書神学
A・ハント	他宗教に救いはないのか? —諸宗教神学の可能性—	71	1991 45~55	諸宗教の神学
K・ヘルツォーク	女性と戦争と平和	71	1991 56~73	フェミニスト神学
L・ブレンダン	天におけるごとく地にも(1)	71	1991 74~82	信仰生活
J・A・コールマン	世俗 —その社会学的考察—	71	1991 83~90	セキュラリズム
D・E・メイヤー	修道院会計の見直し	71	1991 91~95	修道生活
Q・R・コナーズ	修道者養成における危機の役割	71	1991 96~101	修道生活
K・ラーナー	イエス・キリスト(VI)	71	1991 102~112	サクラメントウム・ムンディ
緒方貞子	〈巻頭言〉難民の保護	72	1992 2~3	難民
M・E・ボアリング	物語としてのキリスト論 —マルコのキリスト理解—	72	1992 4~24	マルコ
D・ランギス	喜び —その聖書的、教父的理解—	72	1992 25~35	霊性一般
O・ケーラー	フランシスコ・ザビエル —使命感に燃えたイエズス会の個人主義者—	72	1992 36~55	イエズス会霊性
E・ハンク	アウシュビッツ後のキリスト者	72	1992 56~64	現代と神学
E・ショッケンホフ	人間の尊厳とその生物学的な自然本性	72	1992 65~79	生命倫理
ブラザー・アンドルー	カリスマと委員会	72	1992 80~82	福音宣教
L・A・シェーケル	「さからい」としての良心 —エレミヤ書からの聖書的考察—	72	1992 83~92	旧約聖書神学
L・ブレンダン	天におけるごとく地にも(2)	72	1992 93~101	信仰生活
P・ネメシエギ	人間の神学者(アンリ・ド・リュバク追悼)	72	1992 102~105	エッセイ
J・J・プテンカラム	難民問題の解説 —私の存在の証明書—	72	1992 106~111	エッセイ
小高毅	〈巻頭言〉無知と学知	73	1992 2~4	巻頭言
J・アリソン	義化と意識の構造	73	1992 5~19	パウロ神学
R・L・マドックス	実践的学びとしての神学の回復	73	1992 20~41	実践神学一般
S・J・ダフィー	心の闇(I)—問い直される原罪—	73	1992 42~56	原罪
S・グライナー	祈りは必ずかなえられるのか?	73	1992 57~71	祈り
W・ヴォルベルト	他人の体に対する権利? —臓器移植の若干の問題について—	73	1992 72~88	生命倫理
R・A・ヒル	霊的指導者の守秘義務	73	1992 89~94	霊的指導
J・オーコンネル	愛の理論	73	1992 95~103	霊性一般
J・B・メッツ	政治神学	73	1992 104~111	サクラメントウム・ムンディ
長島正	〈巻頭言〉待望される地球・家族・共同体の神学	74	1993 2~5	エコロジー
J・M・デ・メサ	キリストに従う道としての結婚	74	1993 6~25	婚姻
P・A・ファウルクス	聖書における家庭のイメージ	74	1993 26~36	婚姻
M・E・スカーフ	家庭の神話とモデル	74	1993 37~49	婚姻
J・デュピュイ	キリスト論と諸宗教における救いの神学	74	1993 50~61	諸宗教の神学
S・J・ダフィー	心の闇(II)—問い直される原罪—	74	1993 62~76	原罪
C・M・マルティニーニ	聖書による祈り	74	1993 77~85	祈り
S・ラヤン	地球は神のもの	74	1993 86~102	エコロジー
J・ダーフィット	家庭	74	1993 103~111	サクラメントウム・ムンディ
野村純一	〈巻頭言〉福音宣教推進全国会議の神学	75	1993 2~4	福音宣教
R・A・マッコーマック	二十一世紀に臨む倫理神学 —変動の中の伝統—	75	1993 5~18	倫理神学一般

総目録

U・ルー	新カテキズム	75	1993 19~28	カテキズム
M・レナ	テゼ	75	1993 29~41	霊性一般
R・ホートン	忍耐の神学 —燃えつき症候群を越えて—	75	1993 42~53	現代と神学
M・A・マクファースン・オリヴァー	夫婦の霊性	75	1993 54~69	霊性一般
L・シューマン	召し出しの霊的識別 —イグナチオ・デ・ロヨラの霊操にもとづく方法—	75	1993 70~83	イエズス会霊性
H・テシエ	イスラームから問われるキリスト者 —キリスト者によるイスラーム理解—	75	1993 84~103	イスラーム教
K・ラーナー	神の普遍的救済意志	75	1993 104~111	サクラメントウム・ムンディ
K・リーゼンフーバー	〈巻頭言〉神学的思惟の諸源泉	76	1994 2~5	神学一般
A・ダレス	教会論一般の半世紀	76	1994 6~28	教会論一般
H・フリース	受容 —教会における真理発見への信徒の貢献—	76	1994 29~45	教会論一般
A・ペーター	バルトロメ・デ・ラス・カサス —解放の神学における回心の範型—	76	1994 46~58	解放の神学
G・A・アーバックル	民族性・多文化主義・文化的受肉	76	1994 59~71	インカルチュレーション
M・アマラドス	解放 —諸宗教の協力をめざして—	76	1994 72~93	諸宗教の神学
J・B・メッツ	カール・ラーナー追惜	76	1994 94~99	エッセイ
K・ラーナー	一九九九年、イエズス会修練院にて	76	1994 100~101	エッセイ
K・ラーナー	神の民・教会所属	76	1994 102~110	サクラメントウム・ムンディ
小田武彦	〈巻頭言〉分かち合いの前提となるもの	77	1994 2~5	巻頭言
W・カスパー	聖書と伝統 —一つの聖霊論的展望—	77	1994 6~34	聖書と伝承
K・H・ヴェーガー	現代の神証明の構造	77	1994 35~44	基礎神学一般
W・キルヒシュレーガー	エウカリスチア —共同体の祝祭としての感謝の祭儀—	77	1994 45~52	聖体
M・L・ブラン	霊的同伴の実践	77	1994 53~59	霊的指導
W・ランベルト	「霊操を与える者」 —霊操における同伴者の役割—	77	1994 60~71	イエズス会霊性
A・ピエリス	アジアのキリスト	77	1994 72~85	アジアの神学
D・ミュレール	旅する者の祖国 —移住の倫理のために—	77	1994 86~101	社会倫理
A・グリルマイアー	キリスト論	77	1994 102~113	サクラメントウム・ムンディ
白柳誠一	〈巻頭言〉センスス・エクレシエ	78	1995 2~3	巻頭言
A・ダレス	『霊操』の教会規定	78	1995 4~17	イエズス会霊性
P・レクリヴァン	改革者イグナチオ? —『霊操』の教会規定の歴史的読解—	78	1995 18~31	イエズス会霊性
J・G・ゲルハルツ	教会の感覚 —イグナチオ・デ・ロヨラの教会性—	78	1995 32~45	イエズス会霊性
J・クレマー	イエスの根本願望 —イエスが本来望んだこと、今日も望んでいること—	78	1995 46~65	キリスト論
M・ジュリアーニ	霊の動き	78	1995 66~77	イエズス会霊性
E・コレット	ラーナー神学の哲学的基礎	78	1995 78~90	カール・ラーナー
J・B・メッツ	カール・ラーナー —人間の神学的名誉のための闘い—	78	1995 91~102	カール・ラーナー
K・ラーナー	神学	78	1995 103~115	サクラメントウム・ムンディ
濱尾文郎	〈巻頭言〉「時のしるし」を読みとる	79	1995 2~6	巻頭言
N・グライナツハー	新時代におけるカトリックの同一性	79	1995 7~18	教会論一般
A・クノックアールト	カトリック教会カテキズム	79	1995 19~33	カテキズム
E・ファイル	『新カテキズム』は信仰を正しく伝えうるか?	79	1995 34~50	カテキズム
R・ヘイト	今日に伝えるイエス	79	1995 51~74	キリスト論
J・W・オマリー	イグナチオは教会の改革者か?	79	1995 75~92	イエズス会霊性
J・バーナーディン	司祭 —秘義の担い手・魂の医者—	79	1995 93~103	司祭職
M・L・グーブラー	私は道・真理・命	79	1995 104~113	新約聖書神学
K・ベルガー	聖書釈義学と組織神学	79	1995 114~125	聖書釈義学

総目録

F・ケルスティエンス	希望	79	1995 126～135	サクラメントウム・ムンディ
田邊董	〈巻頭言〉観想への招き	80	1996 2～5	霊性神学
W・バイネルト	大学神学部と教会	80	1996 6～24	神学教育
M・デルガド	岐路に立つヨーロッパ神学	80	1996 25～38	インカルチュレーション
K・ブラーゼル	多文化的キリスト教・解放のための構想	80	1996 39～55	インカルチュレーション
V・ティリマンナ	国家主権と人道的介入	80	1996 56～71	社会倫理
E・グシキンデ	イエスとサマリア人 ―対話の範型―	80	1996 72～77	福音宣教
J・W・オマリー	ミッションと初期イエズス会員	80	1996 78～86	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	霊操におけるスーパーバイザーとは	80	1996 87～92	イエズス会霊性
J・R・サックス	イグナチオのミスティシズム	80	1996 93～103	イエズス会霊性
K・ラーナー	教導職	80	1996 104～117	サクラメントウム・ムンディ
徳善義和	〈巻頭言〉現代の教会への共通の問い ―ルター没後四五〇年に「九十五箇条」を読む―	81	1996 2～6	巻頭言
M・ズイーヴェルニヒ	宣教の方向転換 ―宣教の歴史の実績と将来の課題―	81	1996 7～21	福音宣教
M・ゼックラー	信教の自由と寛容	81	1996 22～41	エキュメニズム
A・ピエリス	諸宗教間対話と諸宗教の神学 ―アジアのパラダイム―	81	1996 42～51	諸宗教の神学
J・レーザー	「ルターの年」とエキュメニズム	81	1996 52～57	エキュメニズム
V・P・ファーニッシュ	パウロを位置づける ―よりよい理解に向けて―	81	1996 58～68	パウロ神学
L・ポフ	解放の神学とエコロジー ―分立か互恵か?―	81	1996 69～79	解放の神学
J・ライター	遺伝子治療と倫理	81	1996 80～88	生命倫理
P=H・コルベンバッハ	イエズス会員の派遣と信徒との協力	81	1996 89～95	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第二回》「第一週」の経験の中でのキリスト	81	1996 96～102	イエズス会霊性
P・マインホルト	プロテスタンティズム	81	1996 103～115	サクラメントウム・ムンディ
青木清	〈巻頭言〉科学と宗教の対話への期待	82	1997 2～5	自然科学と神学
R・A・マッコーマック	回勅『いのちの福音』を読む	82	1997 6～18	回勅
J・フックス	「いのちの福音」と死の文化	82	1997 19～33	回勅
R・A・マッコーマック	正・不正から善・悪へ ―識別は倫理的問題に何を寄与するか―	82	1997 34～48	倫理神学一般
N・グライナッハー	教化か、初歩要理教育か? ―『新カテキズム』についての意見―	82	1997 49～63	カテキズム
R・ジベリーニ	エコロジーに関する神学論争	82	1997 64～72	エコロジー
E・ツェンガー	我々の第一の契約 ―キリスト者にとっての旧約聖書の重要性―	82	1997 73～88	旧約聖書神学
タブレット誌	アジアの神学者が異端者として宣告され破門された	82	1997 89～94	バラスリヤ師関連
アーヘン・ミッシオ宣教学研究	バラスリヤ師の破門に関する声明書	82	1997 95～96	バラスリヤ師関連
S・パイナダス	バラスリヤの事件	82	1997 97～98	バラスリヤ師関連
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第三回》霊操「第一週」の終わりの霊操者の霊的状态	82	1997 99～107	イエズス会霊性
M=J・ギュー	教会論一般	82	1997 108～115	サクラメントウム・ムンディ
高橋重幸	〈巻頭言〉「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい」	83	1997 2～6	修道生活
R・マックダーモット	奉献生活 ―起源二千年に向けての召命―	83	1997 7～13	回勅
J・ズートブラック	イエスの弟子であることと修道生活	83	1997 14～21	修道生活
M・ティッド	修練期の回想 ―二十世紀末の修練期を振り返って―	83	1997 22～29	修道生活
M・アンチラ	教会公文書における修道者の従順	83	1997 30～39	修道生活
A・ダレス	信仰の教會的次元	83	1997 40～51	教会論一般
O=H・ペッシュ	トリエント公会議と今日のエキュメニカル対話 ―カトリックからの展望―	83	1997 52～70	エキュメニズム
P・M・ツレーナー	再婚	83	1997 71～84	婚姻
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第四回》霊操 ひとたび霊操が達成されると	83	1997 85～89	イエズス会霊性

総目録

M=J・ギュー	教会	83	1997 90~114	サクラメントウム・ムンディ
J・ネラン	〈巻頭言〉現代におけるキリスト論とは	84	1998 2~5	キリスト論
R・ヘイト	イエスと世界の諸宗教	84	1998 6~28	諸宗教の神学
P・C・ファン	イエス —アジア人の顔をした救い主—	84	1998 29~56	キリスト論
J・マッカーシー	宇宙的キリストとエコロジー	84	1998 57~65	キリスト論
A・ラフォ	ホアン・ルイス・セグンドの「神学の深みとしての霊性」	84	1998 66~68	霊性神学
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	決定的な歩み —義化の教説に関するルーテル並びにカトリック教会の宣言—	84	1998 69~81	エキュメニズム
T・ローシュ	明日の教会の司祭職	84	1998 82~98	司祭職
K・ラーナー	恩恵	84	1998 99~119	サクラメントウム・ムンディ
吉山登	〈巻頭言〉生命倫理と社会倫理のかかわり	85	1998 2~8	生命倫理
教皇庁立生命アカデミー	ヒト・ゲノムの研究と倫理	85	1998 9~15	生命倫理
E・D・ペレグリーノ	安楽死と介助自殺	85	1998 16~31	生命倫理
C・クンマー	子宮外墮胎? —胚の生命の始まりを決定する際の実証的証拠—	85	1998 32~38	生命倫理
D・ミート	「市場」と人間の尊厳の不可侵性 —生体臨床医学を例として—	85	1998 39~46	生命倫理
S・ベヴァンズ	アジアにおけるインカルチュレーションの歩み —アジア司教協議会連盟の二十五年間(一)	85	1998 47~66	インカルチュレーション
G・クラウス	普遍的な墮罪状態 —原罪概念に代わる類語—	85	1998 67~75	原罪
N・ローフィンク	詩編とキリスト教の黙想 —詩編を理解するための最終編集の意義—	85	1998 77~88	詩編
R・メネ	修辞分析 —聖書理解の新しい研究方法—	85	1998 89~105	聖書釈義学
タブレット誌	バラスリア師破門の撤回	85	1998 106	バラスリヤ師関連
M・シュマウス	聖霊	85	1998 107~119	サクラメントウム・ムンディ
結城了悟	〈巻頭言〉上川島からの声と日本の殉教者	86	1999 2~5	殉教者
P・C・ファン	神の国 —アジアにとって神学的シンボルか?—	86	1999 6~25	神の国
H・ヴァルデンフェルス	宗教における救いのイメージ	86	1999 26~35	諸宗教の神学
金 壽煥(キム・スファン)	アジアへの宣教	86	1999 36~44	福音宣教
K・ラーナー	キリスト教の絶対性の主張について	86	1999 45~58	教義
G・オコリンズ	イエスのイメージ —呼称によるキリスト論の再活用—	86	1999 59~79	キリスト論
J・M・カスティリヨ	霊性に伴う「危険」	86	1999 80~85	霊性神学
N・ローフィンク	貧しさについての三様の語り方 —詩編一〇九をヒントに—	86	1999 86~102	詩編
K・ベルガー	救済史(一)	86	1999 103~111	サクラメントウム・ムンディ
山本襄治	〈巻頭言〉二十一世紀に向かう教会	87	1999 2~3	巻頭言
W・クラウスニッツァー	ローマ・カトリック教会と教皇職	87	1999 4~11	教導職
H・ヴァルデンフェルス	不謬性	87	1999 12~23	教導職
P・ヒューナーマン	信仰を守るために? —教義学者の反問—	87	1999 24~33	教義
L・エルシー	教会における公正と現代の法制度	87	1999 34~45	教導職
H=J・サンダー	宗教の差異 —聖なるものの多元性における信仰—	87	1999 46~62	諸宗教の神学
H・ヘーグスタド	ユダヤ人イエス —異邦人の救い主か、イスラエルのメシアか?—	87	1999 63~71	キリスト論
E・ショッケンホフ	医学研究の必要性と限界	87	1999 72~85	倫理神学一般
D・ビゾン	男性の霊性	87	1999 86~95	霊性神学
M・ケール	栄光のうちに、主よ、あなたが来られるまで	87	1999 96~101	終末論
F・A・サリバン	聖公会との対話に新たな障害	87	1999 102~105	エキュメニズム
A・ダルラプ	救済史(二)	87	1999 106~113	サクラメントウム・ムンディ
國井健宏	〈巻頭言〉新しい時代の新しい典礼?	88	2000 2~4	典礼一般
W・パネンベルク	「義認の教義についての共同宣言」	88	2000 6~9	エキュメニズム

総目録

E・ユンゲル	枢要な問題 —義認の教義についての共同宣言—	88	2000	10~17	エキュメニズム
W・カスパー	教会一致への途上における里程標 —義認の教義についての共同宣言—	88	2000	18~21	エキュメニズム
K・レーマン	どのような「コンセンサス」に到達したのか —義認の教義についての共同宣言—	88	2000	22~28	エキュメニズム
F・クーン	司牧職間の協力 —はざまに漂いながら—	88	2000	29~36	司牧
R・マッケンナ	教会の宣教使命 —G・パウムの思想分析—	88	2000	37~53	福音宣教
R・ウィークランド	地球規模化する世界、多文化の教会	88	2000	54~67	教会論一般
J・H・マッケンナ	幼児洗礼の神学的考察	88	2000	68~79	洗礼
P=H・コルベンバッハ	現代に挑戦するカトリック教育 —ポーランドでのイエズス会学校の課題—	88	2000	80~86	イエズス会霊性
W・ベッケンフェルデ	ドイツ・カトリック教会の現状 —教会法学者の目から—	88	2000	87~105	教会法
C・R・カバルス	意識の糾明	88	2000	106~115	イエズス会霊性
柳瀬睦男	〈巻頭言〉自然にあらわれた神の栄光	89	2000	2~3	自然科学と神学
G・コイン	宇宙 —自然科学の理解とその神学的意味—	89	2000	4~11	自然科学と神学
R・コルターマン	進化現象における選択の意味と役割	89	2000	12~20	自然科学と神学
J・モルトマン	霊の賜物とそのキリスト教的同一性	89	2000	21~26	聖霊
T・F・オメアラ	ターザン、ラス・カサス、ラーナー —トマス・アクウイナスの拡大された恩恵の理論—	89	2000	27~40	恩恵論
N・A・ダラヴェール	カトリック・フェミニスト神学を目指して	89	2000	41~60	フェミニスト神学
E・フックス	倫理神学の半世紀	89	2000	61~68	倫理神学一般
R・ノイデッカー	ラビ・ユダヤ教と福音書に見られる師弟関係	89	2000	69~81	ユダヤ教
H・S=シュトラウマン	「罪は女から始まり…」(シラ書25章24節)	89	2000	82~97	フェミニスト神学
C・R・カバルス	信徒のものであるイグナチオの霊性 —「イグナチオ的あり方」とは—	89	2000	98~111	イエズス会霊性
岩島忠彦	〈巻頭言〉カトリック神学のゆくえ	90	2001	2~3	宗教教育
教皇庁立生命アカデミー	ヒト胚性幹細胞の作成および科学的・治癒的用途に関する宣言	90	2001	4~11	生命倫理
J・B・メッツ	神と時 —モデルネの境域における神学と形而上学—	90	2001	12~28	基礎神学一般
A・ニコラス	キリスト教の脱西洋化 —不幸か、新たなチャンスか—	90	2001	29~45	福音宣教
G・ポツカルスキー	東西教会の分断と再合同	90	2001	46~62	エキュメニズム
L・ロース	芸術の象徴表現、文化、宗教的なもの	90	2001	63~74	典礼一般
N・ローフィンク	貧しい人は地を継ぐ —詩編37と真福八端—	90	2001	75~88	旧約聖書神学
C・M・マルティニー	教皇ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼 —和解—	90	2001	89~97	神学的エッセイ
『アメリカ』誌	教会における法の適正手続き	90	2001	98~100	教導職
C・R・カバルス	現代社会における二つの霊の動き	90	2001	101~116	霊性神学
J・モラー/A・サンド	人間(1)	90	2001	117~125	サクラメントウム・ムンディ
越前喜六	〈巻頭言〉なぜ教会は学問に力をいれるべきか	91	2001	2~4	巻頭言
W・カスパー	普遍教会と地方教会との関係	91	2001	5~17	教会論一般
P・C・ファン	解放の神学の方法	91	2001	18~39	解放の神学
H・クラマー	結婚、忠実、離婚エトスの変化	91	2001	40~54	婚姻
J・ピタウ	キリスト教信仰とカトリック教育の四つのアイコン	91	2001	55~60	神学的エッセイ
J・コモンチャク	「事件」としての第二バチカン公会議	91	2001	61~84	教会論一般
W・フルスト	バーチャル・リアリティーと秘跡	91	2001	85~96	秘跡論一般
B・グロム	「エソテリック」の魅惑	91	2001	97~109	神秘主義
D・J・フィッツパトリック	親としての霊性	91	2001	110~115	霊性一般
K・ラーナー	人間(2)	91	2001	116~123	サクラメントウム・ムンディ
朴憲郁	〈巻頭言〉二十一世紀とパウロの終末論的希望	92	2002	2~4	終末論
O・ラッシュ	信仰のセンス —啓示理解の信仰—	92	2002	5~31	啓示

総目録

G・メイシー	中世初期における女性の叙階	92	2002	32～53	叙階
D・グッド	新約聖書と同性愛	92	2002	54～71	性的マイノリティー
M・ウェレット	三位一体と主の晩餐 —契約の神秘—	92	2002	72～93	三位一体
コンキリウム誌	米国同時多発テロ事件に対する宣言	92	2002	94～97	社会倫理
N・ローフィンク	旧約聖書とキリスト者の日常生活	92	2002	98～114	旧約聖書神学
H・M=ケラー	ルカ福音書のマリア	92	2002	115～130	ルカ
S・キーヒレ	私に従って十字架を	92	2002	131～135	霊性一般
岡田武夫	〈巻頭言〉現代日本の教会のための神学的課題	93	2002	2～3	日本の神学
J・ソプリノ	犠牲者によるグローバル化の贖い	93	2002	4～20	解放の神学
E・ツェンガー	聖書の創造神学	93	2002	21～40	旧約聖書神学
J・P・マイヤー	史的イエスとキリスト教奉仕職 —その歴史的つながりはあるか?—	93	2002	41～62	キリスト論
E・T・グロツペ	イヴ・コンガールの聖霊の神学	93	2002	63～84	聖霊
C=T・ライ	アジアの神学における宗教間対話	93	2002	85～94	諸宗教の神学
M・G・ローラー	変わりゆく結婚モデル	93	2002	95～100	婚姻
C・ドーマン	神学が祈りにとりいれられるとき(詩編103)	93	2002	101～111	詩編
B・ファイニンガー	学校での聖書教育	93	2002	112～123	宗教教育
J・ラッツィンガー	地方教会と普遍教会	93	2002	124～133	教会論一般
手塚奈々子	〈巻頭言〉教父と現代	94	2003	2～3	巻頭言
J・モルトマン	神の義認	94	2003	4～13	教父学
H=J・レーリク	「神化」—救済論のエキュメニカルなキーワード—	94	2003	14～34	救済論
P・ヘンリッヒ	原理主義とは何か	94	2003	35～46	現代と神学
J=L・マリオン	エマオへの道における霊的直観	94	2003	47～57	現代と神学
E・ジョンソン	神の友、預言者であるマリア —マリア伝承の読み方—	94	2003	58～71	マリア論
L=M・ショーベ	終末論と秘跡	94	2003	72～84	終末論
J・ノイナー	啓示の豊かさ —『ドミヌス・イエズス』についての考察—	94	2003	85～93	啓示
S・フレイン	ガリラヤとエルサレム —ユダヤ復興の地理学的視点から—	94	2003	94～112	新約聖書神学
教皇庁立生命アカデミー	クローニングに関する考察	94	2003	113～121	生命倫理
小野寺功	〈巻頭言〉京都学派とキリスト教	95	2003	2～4	哲学と神学
W・カスパー	エキュメニズムの現状と将来	95	2003	5～23	エキュメニズム
J・F・キーナン	倫理神学とその歴史	95	2003	24～42	倫理神学一般
C・ベル	儀礼にまつわる歴史 —部族儀礼とカトリック儀礼—	95	2003	43～59	典礼
J・ボイトラー	キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書 —教皇庁聖書委員会発表の新文書—	95	2003	60～74	聖書神学一般
R・F・タフト	聖別のないミサ?	95	2003	75～81	聖体
P・サガノ	女性助祭をめぐる議論の現況	95	2003	82～89	叙階
M・アマラドス	平和のための宗教	95	2003	90～95	アジアの神学
J・モルトマン	イエス・キリスト —犠牲者と行為者の世界における神の義—	95	2003	96～114	救済論
T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(前編) —探し求めて出かける—	95	2003	115～129	霊性神学
大貫 隆	〈巻頭言〉イエスの絶叫	96	2004	2～3	キリスト論
神学ダイジェスト編集委員会	第二バチカン公会議四十周年 —A・ダレスとJ・オマリイの小論を読む—	96	2004	4～22	教会論一般
L・S・ケイヒル	グローバルな倫理に向けて	96	2004	23～45	倫理神学一般
J・P・マイヤー	死者の復活についての論争	96	2004	46～65	新約聖書神学
E・M・ファーベル	一つの始まりである終わり —キリスト教から見たリインカルネーション—	96	2004	66～84	終末論
D・J・シモン	スキレバークスの救済論 —終末的救いと社会的政治的解放—	96	2004	85～113	終末論

総目録

T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(後編) —探し求めて出かける—	96	2004	114~128	霊性神学
カトリック信者の諸権利協会	カトリック教会会憲(ARCC試案)	96	2004	129~141	信仰生活
イオアン高橋保行	〈巻頭言〉現代とエキュメニズムと正教	97	2004	2~4	エキュメニズム
C・スタモウリス	エキュメニズム的教会論と三位一体の交わり	97	2004	5~17	エキュメニズム
J・Y・タン	アジア特別シノドス「提題解説」に対する日本とインドネシアの公式回答	97	2004	18~34	アジアの教会
P・C・ファン	宗教上の多重帰属	97	2004	36~57	アジアの神学
A・ピエリス	教会はアジア的すぎるか —N・タナーに応じて—	97	2004	58~69	アジアの教会
E・ツェンガー	男と女として造られた人間 —創世記2~3章を読む—	97	2004	71~76	創世記
J・マナス	セクシュアリティ、独身制、信仰の探求	97	2004	77~92	婚姻
G・コールマン	同性結合と結婚	97	2004	93~104	性的マイノリティー
J・セルヴェ	受肉におけるマリアの役割	97	2004	106~123	マリア論
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (前編)	97	2004	124~133	典礼史
稲垣 良典	〈巻頭言〉「神学すること」について考える	98	2005	2~4	巻頭言
K・アングレート	政治的問題としての—神論— —キリスト教的終末論から考える—	98	2005	5~22	神概念
K・R・ハイメス	正戦と軍事介入	98	2005	23~35	戦争
J・フレデリックス	カトリック教会と他宗教 —真実で尊いものを何も排除しない—	98	2005	36~60	諸宗教の神学
T・シュナイダー	共同聖餐への道? —カトリック的視点からの検討—	98	2005	61~82	エキュメニズム
S・ヘル	ルーテルとの共同聖餐 —見通しと限界、カトリックからの提言—	98	2005	83~96	エキュメニズム
H・フランケレ	「聖書」神学とは? —意味論的・史的考察—	98	2005	97~114	新約聖書神学
P=H・コルベンバッハ	霊操と協働者たち	98	2005	115~121	霊的指導
R・ハメル、M・パニコラ	生命維持は義務か? —伝統的教説とその修正について—	98	2005	122~131	生命倫理
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (後編)	98	2005	132~143	典礼史
梶山 義夫	〈巻頭言〉職員室の中で近頃思うこと	99	2005	2~5	宗教教育
S・ミーディマ、W・L・ウオーデッカー	ミッションスクールのアイデンティティーと生徒のアイデンティティー形成	99	2005	6~19	宗教教育
T・H・グルーム	総合的信仰教育	99	2005	20~30	宗教教育
F・C・ミュラー	修道会による学校への支援(スポンサーシップ) —カトリック学校の伝統を守るために—	99	2005	31~50	宗教教育
C・ウーリンガー	「塔のある町を建てよう…」	99	2005	51~60	創世記
M・E・グラハム	人は何によって倫理的に善とされるか —J・フックスによる倫理的善と救いに関する考察—	99	2005	61~81	倫理神学一般
J・マツタム	恩恵の神学	99	2005	82~97	恩恵論
G・アウグスティン	全体的(ホーリスティック)な霊性の土台としての創造信仰	99	2005	98~114	霊性神学
E・クンツ	日常における神認識の場とは?	99	2005	115~124	神体験
H・M・カスティーリョ	キリスト教の霊性の中心	99	2005	125~135	霊性神学
佐久間 勤	〈巻頭言〉神学ダイジェスト100号記念によせて	100	2006	2~4	巻頭言
光延 一郎	神学ダイジェスト100号に添えて	100	2006	5~7	巻頭言
K・ラーナー	—カトリック神学者の経験	100	2006	8~23	カール・ラーナー
百瀬 文晃	カール・ラーナーの神学と日本	100	2006	24~38	カール・ラーナー
K・レーマン	教会にとってのカール・ラーナーの意義	100	2006	39~54	カール・ラーナー
K・P・フィッシャー	『教会の構造改革』再読	100	2006	55~73	カール・ラーナー
C・ケッペラー	カール・ラーナー恩恵論の核心 —アンリ・ド・リュバックとの対比において—	100	2006	74~96	カール・ラーナー
R・A・ジーベンロック	カール・ラーナー資料室での経験	100	2006	97~109	カール・ラーナー
J・ソブリノ	ラテン・アメリカから見たカール・ラーナー	100	2006	110~128	カール・ラーナー
P・エンディーン	英語圏におけるカール・ラーナー	100	2006	129~150	カール・ラーナー
A・ラフェルト	カール・ラーナー研究のために	100	2006	151~158	カール・ラーナー

総目録

濱尾 文郎	〈巻頭言〉第二バチカン公会議後の教会と現状の要望	101	2006 2~7	第二バチカン公会議
J・W・オマリ	第二バチカン公会議 —伝統との非連続性—	101	2006 8~34	第二バチカン公会議
A・ダレス	『教会憲章』の秘跡的教会論	101	2006 35~49	教会憲章
H・フランケメレ	『啓示憲章』の進歩と停滞	101	2006 50~57	啓示憲章
J・マケヴォイ	『現代世界憲章』の意義	101	2006 58~77	現代世界憲章
C・テオバルト	第二バチカン公会議文書の内的原則と今日的課題	101	2006 78~101	第二バチカン公会議
F・A・サリバン	司教協議会に教導権はあるのか	101	2006 102~121	教導職
P=H・コルベンバッハ	今日における霊操の教会規定 —公会議後の教会において考え、判断し、感じるための諸	101	2006 122~131	イエズス会霊性
西山 俊彦	〈巻頭言〉至高の福音のささやかな理解と実現のために	102	2007 2~7	霊性神学
J・A・エストラーダ	現代の挑戦と教会の人間性回復	102	2007 8~21	霊性神学
A・ニコラス	アジアにおけるキリスト教の危機	102	2007 22~30	霊性神学
陳 南州	状況(コンテクスト)に根差した普遍性に向けて —台湾基督長老教会の神学と実践—	102	2007 31~51	霊性神学
J=Y・カルヴェ	社会使徒職とその霊性 —イエズス会の取り組み—	102	2007 52~61	イエズス会霊性
P・シェルドレイク	歴史の中の霊性 —社会的観点から—	102	2007 62~74	霊性神学
H・ケスラー	復活をどのように考えるのか?	102	2007 75~84	キリスト論
C・ヤンセン	政治的抵抗者としてのイエスの想起 —旅の途上のキリスト論(ルカ24章13~35節)—	102	2007 85~92	新約聖書神学
R・S・スギルタラージャ	多宗教社会における聖書解釈 —パウロの「回心」の再読を例に—	102	2007 93~105	聖書釈義学
C・M・マルティニ	B・ロナーガンの教会への奉仕について	102	2007 106~120	ロナガン
小田 武彦	日本におけるカトリック学校の課題	103	2007 2~12	巻頭言
F・ウィルフレッド	今日の大学における神学研究	103	2007 13~22	カトリック学校
J・R・コノリー	カトリック大学における神学	103	2007 23~39	カトリック学校
M・T・ハリナン	岐路に立つ米国のカトリック学校	103	2007 40~63	カトリック学校
J・J・ディジャコモ	カトリック学校への提言	103	2007 64~70	カトリック学校
A・ライダー	大バシレイオスの聖霊論	103	2007 71~81	聖霊
W・レーザ	ハンス・ウルス・フォン・バルタザールとそのイグナチオ的—教父的源泉	103	2007 82~91	バルタザール
S・v・アーブ	健康と医学の神学に向けて	103	2007 92~101	現代神学
M・ノイマン	霊的旅路での聖書の役割	103	2007 102~111	霊的指導
M・エープナー	イエスの悪魔祓いをめぐる論争	103	2007 112~119	新約聖書神学
M・フランシス	トリエントのミサを認める自発教令	103	2007 120~125	回勅
竹内 修一	〈巻頭言〉いのちへの覚醒	104	2008 2~5	生命倫理
B・V・ジョンストン	カトリック倫理神学における伝統論	104	2008 6~23	生命倫理
J・F・キーナン	性と倫理神学をめぐる議論	104	2008 24~40	生命倫理
J・M・マクダーモット	『フマーネ・ヴィテ』再読	104	2008 41~66	生命倫理
T・A・サルズマン、M・G・ローラー	真に人間的な性における性的補完性	104	2008 67~89	生命倫理
J・シェッファー	環境倫理のための神学的枠組み	104	2008 90~110	環境倫理
J・F・キーナン	司祭の倫理的権利の構築を目指して	104	2008 111~124	司祭職
宮本 久雄	〈巻頭言〉ナザレのイエス	105	2008 2~6	巻頭言
W・レーザ	『ナザレのイエス』への十二の手引き	105	2008 8~25	回勅
T・ゼーディング	—聖書学者の応答	105	2008 26~37	回勅
P・スタインフェルズ	神の御顔たるイエス	105	2008 38~42	回勅
T・W・ティレイ	新たなイエス研究 —史的イエスでなく、歴史上のイエスを—	105	2008 43~69	新約聖書神学
D・ベラー	シオンの娘マリア —聖書の中のイエスの母—	105	2008 70~82	マリア論
K・レーマン	「キリストの教会はカトリック教会の中に存在する」 —『教会憲章』第8項をめぐるカトリック	105	2008 83~95	教会論

総目録

M・カイザー	離婚して再婚した信徒の秘跡受領	105	2008 96～106	婚姻
C・M・マルティニー	ポストモダン世界の信仰教育	105	2008 107～112	宗教教育
K・フェヒテル	今日の司祭養成のために —イグナチオの司祭像—	105	2008 113～125	司祭職
朴 憲郁	〈巻頭言〉使徒パウロの使信から聞き分ける	106	2009 2～4	パウロ神学
D・M・ノイハウス	パウロを再発見する —パラダイム変化の試み—	106	2009 5～21	パウロ神学
N・パウメルト	新しいパウロ観	106	2009 22～48	パウロ神学
G・キーレンケリイ	信仰による義認	106	2009 49～59	パウロ神学
H＝J・クラウク	キリストの体 —I コリント書10～12章における主の晩餐—	106	2009 60～70	パウロ神学
F・ゴンサルヴェス	キリストと共に十字架にかかる	106	2009 71～78	パウロ神学
P・ヒューナーマン	ナザレのイエスとは誰か? —我らの友、キリスト・イエス—	106	2009 79～90	キリスト論
W・ジョンストン	宗教者は平和をもたらすことができるのか	106	2009 91～102	諸宗教の神学
D・M・ナイト	「み心の信心」の再生に向けて	106	2009 103～109	信仰生活
梅村昌弘	〈巻頭言〉『ミサ典礼書』の改訂	107	2009 2～7	ミサ
G・ダニールズ	第二バチカン公会議四十年後の典礼 —後退か、絶頂か—	107	2009 8～29	典礼一般
J・F・ボルドヴィン	典礼史の用い方の数々	107	2009 30～46	典礼史
R・F・タフト	イエズス会の典礼の課題	107	2009 47～68	典礼一般
A・T・ケイルガ	復活と葬儀典礼	107	2009 69～80	典礼神学
具 正謨	四旬節 —過越祭儀と入信の秘跡の準備—	107	2009 81～89	典礼一般
I・イエスダサン	四旬節の精神	107	2009 90～98	典礼一般
E・S・ゲルステンベルガー	神はいずこにおられるのか —詩編作者の叫び—	107	2009 99～114	詩編
具 正謨	新『ミサ典礼書』日本語訳について	107	2009 115～117	ミサ
幸田和生	〈巻頭言〉司祭が司祭であることの意味	108	2010 2～7	司祭職
K・ラーナー	回心	108	2010 8～17	ゆるし
J・フックス	罪と回心	108	2010 18～31	罪
具 正謨	回心理論と現代神学	108	2010 32～44	ゆるし
B・ロナーガン	神学の土台としての回心	108	2010 45～54	ゆるし
J＝M・ローラン	司祭養成の考察(1) —感情における問題点—	108	2010 55～67	司祭職
G・クッチ/H・ゾルナー	司祭養成における心理学の貢献	108	2010 68～76	司祭職
L・コフラー	まず、あなた自身を癒しなさい	108	2010 77～80	司祭職
R・ストレンジ	叙階 —我が道ではなく、イエスの道—	108	2010 81～84	司祭職
R・コルターマン	進化と創造	108	2010 85～100	自然科学と神学
J・シュミット	進化と創造信仰	108	2010 101～117	自然科学と神学
理辺良 保行	〈巻頭言〉「時のしるし」としてのエコロジカル・クライシス	109	2010 2～3	エコロジーの神学
A・C・アギレ	エコロジーの神学 —認識論的アプローチ—	109	2010 4～16	エコロジーの神学
F・ウィルフレッド	諸宗教によるエコロジーの神学に向けて	109	2010 17～30	エコロジーの神学
N・ダーラー	地球の霊性と禁欲の神学	109	2010 31～41	エコロジーの神学
フランススコ会(小さき兄弟会)「正義と平和および	エコロジカルな回心と環境正義 —実践のための手引き—	109	2010 42～49	エコロジーの神学
R・イルクナー	「我々の同意において我々は罪を犯す —罪の神学の 아우グスティヌス的範型をめぐって—	109	2010 50～61	罪
M＝L・グーブラー	イエスの復活 —神の国の告知としての復活信仰—	109	2010 62～73	復活
C・W・トロール	キリスト教徒とイスラム教徒の共同の祈り	109	2010 74～89	イスラム教
J＝M・ローラン	司祭養成についての考察(二) —感情と霊的生活—	109	2010 90～102	司祭職
K・F・ペクラーズ	信仰を伝えるために	109	2010 103～108	現代世界と信仰
岩島 忠彦	〈巻頭論文〉今日におけるキリスト論 —その諸傾向と課題—	110	2011 2～19	キリスト論

総目録

T・G・ワイナンディ	カルケドン公会議 —キリスト論の現代的諸問題—	110	2011 20~37	キリスト論
E・ツェンガー	ユダヤ教の視点におけるキリスト教の神論 —いまだかつて、神を見た者はいない(ヨハネ1)	110	2011 38~49	ユダヤ教とキリスト教
J・グラナドス	マリアの記憶がキリスト理解に果たす役割	110	2011 50~62	キリスト論
M・アマラドス	世俗主義に対する宗教の答え	110	2011 63~77	世俗主義
H・シェンドルフ	哲学と神学 —様々な姿を示す関係性—	110	2011 78~97	哲学と神学
T・シェルトル	基礎神学の位置確認 —ポストリベラル神学を背景に—	110	2011 98~114	基礎神学
J=M・ローラン	司祭養成についての考察(三) —二つの識別—	110	2011 115~128	司祭職
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—	110	2011 129~137	カトリック学校
川中 なほ子	〈巻頭論文〉ニューマン枢機卿の紋章「心が心に語りかける」	111	2011 2~14	ニューマン
J・H・ニューマン	成義論	111	2011 15~24	ニューマン
J・H・ニューマン	教会の三職	111	2011 25~40	ニューマン
J・H・ニューマン	『平明教区説教集』	111	2011 41~49	ニューマン
J・H・ニューマン	理性との関係から見る信仰の本性	111	2011 50~63	ニューマン
J・H・ニューマン	キリスト教教理発展論	111	2011 64~86	ニューマン
J・H・ニューマン	同意の法則	111	2011 87~114	ニューマン
P・ミルワード	〈特別寄稿〉ニューマン枢機卿の列福	111	2011 115~123	ニューマン
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第二回)	111	2011 124~133	カトリック学校
神学ダイジェスト編集委員会	J・H・ニューマン主要文献(邦語)	111	2011 134	ニューマン
日本聖公会(訳)	東日本大震災のための祈り	112	2012 2~3	苦難
菅原 裕二	災害を前にして	112	2012 4~8	苦難
R・シュペーマン	東日本大震災と原発をめぐるドイツ人哲学者との対話	112	2012 9~19	苦難
山脇 直司	〈解説〉ローベルト・シュペーマンの人と思想	112	2012 20~22	シュペーマン
W・グリム	東日本大震災一年を迎えて	112	2012 23~26	苦難
ザ・ワード・アマング・アス	なぜ善人に悪いことが起こるのか —ヨブ記に見る苦しみの神秘—	112	2012 27~32	苦難
A・エルヴィー	灰と塵のエコロジー神学	112	2012 33~44	苦難
E・クンツ	神の全能を語ることは今日なお意味があるか?	112	2012 45~57	苦難
J・ホール	神の愛から私たちを引き離すことはできない	112	2012 58~61	苦難
B・ロナーガン	み心の信心 —主イエスと無原罪のマリアに—	112	2012 62~67	苦難
宮本 久雄	プロメテウスの火か、聖霊の火か	112	2012 68~78	苦難
日本カトリック司教団	いまずぐ原発の廃止を —福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして—	112	2012 79~85	苦難
姜 禹一	濟州島ガンジェオン村に始まるアジア平和	112	2012 86~92	苦難
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第三回)	112	2012 93~102	カトリック学校
百瀬 文晃	〈巻頭言〉第二バチカン公会議を支えた神学者たち	113	2012 2~4	第二バチカン公会議
M-D・シュニユ	教会の三位一体的基盤	113	2012 5~18	教会
Y・コンガール	神の母性と聖霊の女性性について	113	2012 19~28	聖霊
E・スキレバークス	すべての信者の教導権 —新約聖書の構造より—	113	2012 29~44	教導権
K・ラーナー	信仰、希望、愛	113	2012 45~51	信望愛
H・U・v・バルタザール	すべての霊性の規範としての福音	113	2012 52~61	霊性
X・レオン・デュフル	「わたしの記念としてこれを行いなさい」	113	2012 62~69	聖餐
J・ダニエル	ヨブの四つの顔	113	2012 70~81	ヨブ記
H・ド・リュバック	護教論と神学	113	2012 82~95	基礎神学
W・バイネルト	第二バチカン公会議の背景と軌跡	113	2012 96~109	第二バチカン公会議
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第四回)	113	2012 110~125	カトリック学校

総目録

高祖敏明	〈巻頭言〉上智大学創立百周年の歴史を未来につなぐもの	114	2013 2～10	カトリック学校
米国イエズス会大学協会	イエズス会の教育とイグナチオ的教育法	114	2013 11～15	カトリック学校
尾原 悟	キリシタン時代のイエズス会教育 —ザビエルの宿願「都に大学を」—	114	2013 16～24	カトリック学校
レンゾ・デ・ルカ	対話的宣教とイエズス会の教育 —南米と日本での宣教を比較した考察—	114	2013 25～37	カトリック学校
P・サムウェイ	希望の学校「信仰と喜び」 —チャドとハイチでの実践—	114	2013 38～43	カトリック学校
V・スチュワート	世界を教室に	114	2013 44～51	カトリック学校
イエズス会アジア太平洋協議会	東チモールへの聖イグナチオ学院	114	2013 52～56	カトリック学校
ベネディクト十六世	教育に携わる修道者とカトリック校の学生に向けて	114	2013 57～63	カトリック学校
浦 喜孝	カトリック教育に関するバチカン公文書 —公文書解説・日曜日の教育学—	114	2013 64～82	カトリック学校
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドライン—(第五回)	114	2013 83～92	カトリック学校
F・J・マルティネス＝メディナ	神の言葉と聖画像の関係性	114	2013 93～105	図像学
G・モンタギュー	聖ルカからの手紙	114	2013 106～110	黙想
J・A・コモンチャク	ベネディクト十六世の謙遜 —求められるローマの謙遜—	114	2013 111～114	教皇
J・カー	見過ごされた愛の教え	114	2013 115～117	教皇
M・ヘブルスワイテ	暗い日々から春へ	114	2013 118～122	教皇
D・オレアリー	跪く権威	114	2013 123～126	教皇
浜口 末男	〈巻頭言〉信仰を生きる	115	2013 2～5	信仰生活
V・ロスキー	信仰と神学 —『正教神学概論』(第一回)—	115	2013 6～21	ギリシャ正教の神学
V・ロスキー	二つの一神教と三位一体 —『正教神学概論』(第一回)—	115	2013 22～44	ギリシャ正教の神学
磯村 ロサ	交わりのうちに	115	2013 45～46	随想
B・クノルン	神に向かい、神と語り合う —霊操による対話—	115	2013 47～65	霊操
N・スタンダート	イエスと出会うために —霊操に於ける「場所の設定」—	115	2013 66～80	霊操
N・ヒンターシュタイナー	新時代の宗教的成長のために	115	2013 81～92	宗教心理
A・コント＝スポンヴィユ	魂の救い	115	2013 93～104	無神論
C・テオボルド	司教の団体性における「時のしるし」の識別 —第二バチカン公会議の未知なる体験—	115	2013 105～114	司教の団体性
A・メニケス	捕囚期以前の唯一神礼拝に関する神学的発展史	115	2013 115～124	古代イスラエル史
百瀬 文晃	〈巻頭言〉下からのキリスト論	116	2014 2～4	キリスト論
G・グティエレス	神について語る —解放の神学の方法—	116	2014 5～13	解放の神学
L・ボフ	解放のプロセスとイエス・キリストにおける救い	116	2014 14～27	解放の神学
J・ソブリノ	ラテンアメリカ —罪とゆるしの地—	116	2014 28～42	解放の神学
A・ピエリス	イエスの貧しさに倣うとは	116	2014 43～57	清貧
E・シュスラー＝フィオレンツァ	フェミニスト神学の役割 —沈黙を破り、存在を示す—	116	2014 58～72	フェミニスト神学
H・キュンク	エキュメニカルな諸宗教の神学に向けて	116	2014 73～82	エキュメニズム
R・パニカー	至高体験 —東洋と西洋—	116	2014 83～95	諸宗教の神学
N・ローフィンク	主の祈りとモーセ五書	116	2014 96～102	主の祈り
V・ロスキー	創造(一節～三節) —『正教神学概論』(第二回)—	116	2014 103～118	ギリシャ正教の神学
岡田 友季子	〈巻頭言〉共同宣教司牧を通して	117	2014 2～4	信徒使徒職
P・レイクランド	「信徒」の概念	117	2014 5～13	信徒使徒職
M・C・L・ビンゲメル	第二バチカン公会議と信徒の登場	117	2014 14～22	信徒使徒職
W・ザイベル	教会における信徒	117	2014 23～25	信徒使徒職
A・J・ベヴィラクア枢機卿	信徒の役割 —ヨハネ・パウロ二世『信徒の召命と使命』より—	117	2014 26～38	信徒使徒職
有村 浩一	〈解説〉『信徒教会奉仕職の召命と公認』より	117	2014 39～41	信徒使徒職
C・A・ポバーツ	霊の賜物とキリストの体(一コリント12～14章)	117	2014 42～56	信徒使徒職

S・K・ウツド	信徒教会奉仕職の公認	117	2014	57～68	信徒使徒職
F・ジョージ枢機卿	これからの信徒教会奉仕職	117	2014	69～78	信徒使徒職
K・キルビー	二番目の性？ —新しい「女性神学」について—	117	2014	79～84	フェミニスト神学
W・J・バイロン／C・ゼヒ	彼らはなぜ教会から離れたか？	117	2014	85～91	司牧神学
V・ロスキー	創造(四節～六節) —『正教神学概論』(第三回)—	117	2014	92～109	ギリシャ正教の神学
中野 裕明	〈巻頭言〉聖ヨハネ・パウロ二世の思想	118	2015	2～5	ヨハネ・パウロ二世
J・セイヴィス	ヨハネ・パウロ二世の四半世紀	118	2015	6～9	ヨハネ・パウロ二世
M・トライポール	反対を受けるしるし	118	2015	10～25	ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	ヨハネ・パウロ二世の信仰の神学	118	2015	26～39	ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	新しい福音宣教	118	2015	40～54	ヨハネ・パウロ二世
D・ドール	社会的関心と連帯の教え	118	2015	55～71	ヨハネ・パウロ二世
M・パクワ	ニューエイジ運動とヨハネ・パウロ二世	118	2015	72～79	ヨハネ・パウロ二世
ヨハネ・パウロ二世教皇	結婚と聖体 —いのちと愛の賜物—	118	2015	80～92	ヨハネ・パウロ二世
神学ダイジェスト編集委員会	ヨハネ・パウロ二世教皇公文書リスト(邦語版)	118	2015	93～96	ヨハネ・パウロ二世
V・ロスキー	原罪 —『正教神学概論』(第四回)—	118	2015	97～116	ギリシャ正教の神学
松浦 悟郎	〈巻頭言〉今、問われる平和	119	2015	2～5	平和と宗教
J・モルトマン	正義の実りとしての平和	119	2015	6～20	平和と宗教
M・ヴォルフ	宗教による暴力の正当化について	119	2015	21～28	平和と宗教
R・v・ジンナー	宗教と力をめぐる政治神学	119	2015	29～38	平和と宗教
G・ヴァノニ	シャロームと聖書	119	2015	39～47	平和と宗教
姜 禹一	済州島カンジェオン村平和会議より	119	2015	48～60	平和と宗教
F・ウィルフレッド	平和と和解のための文化資源	119	2015	61～73	平和と宗教
M・ハインツ	独身制と結婚 —犠牲を分かち合う—	119	2015	74～80	修道生活
J・マローン	修道生活における老いの霊性	119	2015	81～95	修道生活
匿名	うつと共に生きる	119	2015	96～97	修道生活
K・シャッツ	再興二百年の新しいイエズス会	119	2015	98～111	イエズス会
A・スパダロ	回勅『ラウダート・シ』への手引き —創造主への賛歌 皆の家を守るために—	119	2015	112～125	環境
鳥巢 義文	〈巻頭言〉生活の中で追体験されている父と子と聖霊	120	2016	2～5	三位一体論
K・ラーナー	三位一体に関する考察	120	2016	6～30	三位一体論
B・M・ドイル	社会的三位一体神学と交わりの教会論	120	2016	31～48	三位一体論
A・デーケン	三位一体の似姿としての人間 —三位一体論的倫理のために—	120	2016	49～56	三位一体論
M・アマラドス	ただ一つの霊と神の多様性について	120	2016	57～67	諸宗教の神学
A・T・ケイルガ	今日の秘跡 —空疎な象徴主義か、オカルト的秘術か—	120	2016	68～81	秘蹟論
O・フックス	聖書の中の暴力 —すべてわたしたちを教え導くため(ロマ15・4)—	120	2016	82～95	暴力
V・ロスキー	キリスト論〈一節～四節〉 —『正教神学概論』(第五回)—	120	2016	96～117	ギリシャ正教の神学
C・ラム	家庭に関するシノドス	120	2016	118～124	家庭
光延 一郎	〈巻頭言〉『ラウダート・シ』と原子力発電	121	2016	2～5	エコロジーの神学
T・カルヒャー／J・ユーベルメッサー	私たちの姉妹である母なる大地のために	121	2016	6～9	エコロジーの神学
D・ファレス	貧しさとの惑星の脆弱さ	121	2016	10～24	エコロジーの神学
O・エーデンホーファー／C・フラツハスラント	地球共有材への配慮を！	121	2016	25～37	エコロジーの神学
L・ラリヴェーラ	イデオロギ的批判を越えて	121	2016	38～48	エコロジーの神学
ドイツ司教協議会	被造世界への義務(前編) —エネルギーとの持続可能な関わり方についての提言—	121	2016	49～64	エコロジーの神学
V・ロスキー	キリスト論〈五節～六節〉 —『正教神学概論』(第六回)—	121	2016	64～75	ギリシャ正教の神学

総目録

J・グラナドス	主の昇天の神秘	121	2016 76～91	キリスト論
J・L・スカ	民数記における古いものと新しいもの	121	2016 92～103	民数記
神庭 靖子	〈巻頭言〉さまざまな家族の形の中で子どもたちの思いは	122	2017 2～6	巻頭言
X・A・サンタマリア	結婚と離婚についてのイエスの教え	122	2017 7～15	結婚・離婚・再婚
J・M・ゴルド	結婚の不解消性の教え —真理と憐れみ—	122	2017 16～22	結婚・離婚・再婚
J・I・G・ファウス	結婚・離婚・再婚をめぐる神学的諸相	122	2017 23～31	結婚・離婚・再婚
J・マシア	夫婦の一致における約束、合意、シンボル	122	2017 32～48	結婚・離婚・再婚
E・ショッケンホフ	結婚の不解消性と再婚	122	2017 49～65	結婚・離婚・再婚
M・R・ダンジェロ	福音と家庭	122	2017 66～78	結婚・離婚・再婚
A・マッテオ	信仰なき最初の世代	122	2017 79～86	福音宣教
カナダ司教協議会	福音派キリスト教についての考察 —隣人との対話に向けて—	122	2017 87～100	エキュメニズム
ドイツ司教協議会	被造世界への義務(後編) —エネルギーとの持続可能な関わり方についての提言—	122	2017 101～116	エコロジーの神学
M・シーゲル	〈巻頭言〉社会教説とは	123	2017 2～7	社会教説
J・フェアシュトラテン	教皇フランシスコと教会の社会教説 —社会へと深く入り込みながら—	123	2017 8～16	社会教説
J・C・スカノーネ	教皇フランシスコと「民の神学」	123	2017 17～33	社会教説
C・F・ヒンジ	カトリック社会教説と労働正義	123	2017 34～48	社会教説
J・M・ベルゴリオ	キリスト教信仰とヒューマニズム	123	2017 49～54	社会教説
D・K・フィン	社会の構造的罪とは何か	123	2017 55～68	社会教説
W・G・ジャンロンド	愛と沈黙	123	2017 69～77	愛
V・ロスキー	聖霊の働き —『正教神学概論』(第七回)—	123	2017 78～89	ギリシャ正教の神学
T・ゼーディング	ルターの聖書釈義と教会改革	123	2017 90～108	ルター
竹内 修一	〈巻頭言〉人格としての性	124	2018 2～7	性的マイノリティー
S・クナウス	キリストの虹色の体とクィア神学	124	2018 8～18	性的マイノリティー
P・I・オドゾー	同性婚をめぐる議論	124	2018 19～26	性的マイノリティー
J・グラミック	米国における同性婚	124	2018 27～33	性的マイノリティー
J・クレイグ	アイルランドにおける同性婚合法化	124	2018 34～38	性的マイノリティー
R・ウィリアムズ	レイシズムと教会 —「審判の朝が来るまで、私が誰であるのか誰も知らない」—	124	2018 39～56	性的マイノリティー
J・F・キーン	罪をめぐる新たな理解とその可能性	124	2018 57～72	罪
I・デリオ	私たちは神の導きを変えることができるのか？	124	2018 73～80	進化論と創造論
V・ロスキー	教会の神秘 —『正教神学概論』(第八回)—	124	2018 81～105	ギリシャ正教の神学
N・キング	主の祈りの翻訳 —「誘惑」もしくは「試み」—	124	2018 106～109	主の祈り
福嶋 裕子	〈巻頭言〉黙示録のヨハネを巡る歴史的状況	125	2018 2～7	黙示録
J・エバツハ	聖書の黙示文学 —「いつまでもこのままではない」—	125	2018 8～19	黙示録
X・A・サンタマリア	模範としてのヨハネの黙示録	125	2018 20～29	黙示録
C・M・アルバレス	ポストモダンにおける終末論と黙示思想	125	2018 30～42	黙示録
J・B・メッツ	時間のうちにある神 —キリスト教の黙示文学的ルーツ—	125	2018 43～54	黙示録
加藤 久美子	フクシマ後に、聖書を読む	125	2018 55～61	苦難
P・R・マッカロール	苦しみと聖なる可能性 —神は憤り、涙する—	125	2018 62～73	苦難
F・ウイルフレッド	マザー・テレサ —貧しき人々の聖人—	125	2018 74～80	聖人
V・ロスキー	像と似姿 —『正教神学概論』(最終回)—	125	2018 81～98	ギリシャ正教の神学
E・バルホルン	律法の詩編	125	2018 99～107	詩編
西原 廉太	〈巻頭言〉聖公会における女性聖職	126	2019 2～7	女性の叙階
A・トンプソン	ビンゲンのヒルデガルトはなぜ女性の司祭叙階を否定したか	126	2019 8～26	女性の叙階

総目録

J・シールス	女性の司祭職について	126	2019 27～35	女性の叙階
G・パニ	女性と助祭職	126	2019 36～46	女性の叙階
P・ザガノ	女性助祭の復活 —小教区の公正なあり方のために—	126	2019 47～54	女性の叙階
J・キッテル	助祭の霊性	126	2019 55～62	女性の叙階
S・ペムゼル＝マイヤー	ジェンダーと霊性	126	2019 63～76	ジェンダー
G・オコリンズ	『愛のよこび』とその背景	126	2019 77～94	教皇フランシスコ
R・マルクス	『ラウダート・シ』にみる教皇フランシスコの思想	126	2019 95～109	教皇フランシスコ
佐藤直子	〈巻頭言〉哲学と神学 —トマス・ア・アクィナスの形而上学と靈魂論の素描から—	127	2019 1～6	哲学と神学
C・ドアティ	ブロンデルの超自然の仮定における哲学と神学の共生	127	2019 7～31	哲学と神学
F・プランマー	ポール・リクール —哲学者にしてキリスト者—	127	2019 32～43	哲学と神学
N・A・ウォーン	ヨゼフ・ピーパーの「神学としての哲学」と科学	127	2019 44～68	哲学と神学
J・V・シャル	ラッツィンガーが語る「理性」「啓示」「思考の冒険」	127	2019 69～87	哲学と神学
A・イヴリー	教皇フランシスコとカリスマ刷新	127	2019 88～97	教皇フランシスコ
H・ヘイカー	正義を求める共苦(コンパッション)	127	2019 98～109	苦難
J・M・フェゲルト	性的虐待への取り組みに対する外部協力の可能性と限界 —聖職者主義の代わりに共感:	127	2019 110～126	性的虐待
三田一郎	〈巻頭言〉科学を通して少しでも神を理解できるか	128	2020 2～15	創造と科学
R・ヘイト	霊性、進化、創造者なる神	128	2020 16～39	創造と科学
L・ボフ/M・ハサウェイ	エコロジーと自然の神学	128	2020 40～50	創造と科学
D・M・ノスウェア	教会の使命としてのエコロジー正義 —宇宙の救済のために—	128	2020 51～67	創造と科学
C・ディーン＝ドラモンド	十字架と復活の知恵のしるしのもとに創造と新創造を解釈する	128	2020 68～77	創造と科学
J・F・ホート	未完成の宇宙における信仰とコンパッション	128	2020 78～91	創造と科学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	128	2020 92～98	霊性心理
ドイツ・カトリック正義と平和委員会	核軍縮の出発点としての核兵器非合法化	128	2020 99～118	反核兵器
勝谷太治	〈巻頭言〉新しい教会の姿、真のシノダリティ(共に歩むこと)を目指したシノドス	129	2020 1～5	若者と共に歩む教会
A・スパダロ	若者シノドスと使徒的勧告『キリストは生きている』	129	2020 6～32	若者と共に歩む教会
D・ファレス	霊的識別 —『キリストは生きている』より—	129	2020 33～45	若者と共に歩む教会
B・レツベン/J・バルツ/L・オッテ/K・ヴェリン	若者の参加に基づく青少年神学	129	2020 46～53	若者と共に歩む教会
P・M・トーマス/V・ヒューネルフェルト	教会の決定に関する若者の参加	129	2020 54～60	若者と共に歩む教会
J・パーケス	「働く学校」 —イエズス会によるカトリック学校モデル—	129	2020 61～66	カトリック学校
G・ゲーデ	女性の助祭職は教会にどのような変化をもたらさうか	129	2020 67～70	女性の叙階
M・エーブナー	新約聖書は「同性愛」を禁じているのか	129	2020 80～87	性的マイノリティー
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	129	2020 88～94	霊性心理
イ・キホン	朝鮮半島南北カトリック教会の交流	129	2020 95～108	地域教会
D・ホレンバッハ	パンデミックで最も苦しむのは誰か	129	2020 109～114	COVID-19危機
D・J・デイリー	治療配分に関するカトリック的ガイドライン	129	2020 115～124	COVID-20危機
岩本潤一	〈巻頭言〉『聖書 聖書協会共同訳』発行の意義	130	2021 1～7	聖書の翻訳と解釈
W・T・ディケンズ	典礼が聖書解釈に及ぼす影響	130	2021 8～22	聖書の翻訳と解釈
D・カーハン	聖書解釈の視点としての空間性 —ヨハネ福音書9章を例に—	130	2021 23～38	聖書の翻訳と解釈
B・トゥリムペ	間テクスト解釈とは —創世記1章とエレミヤ書4章23～28節を例に—	130	2021 39～47	聖書の翻訳と解釈
H・ホーピング	「私たちが試みに導くことのないように —主の祈りが問う、悪魔についての語りと私たちの祈	130	2021 48～57	聖書の翻訳と解釈
H・U・ヴァイデマン	「試み」と「試し」 —心騒がせる一つのテーマに関する新約聖書の解釈—	130	2021 58～72	聖書の翻訳と解釈
J・グレーシュ	翻訳学と解釈学	130	2021 73～90	聖書の翻訳と解釈
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	130	2021 91～97	霊性心理

総目録

D・E・デコッセ	良心、カトリシズム、政治	130	2021 98～113	カトリシズムと政治
M・フォークト	神学の座としての社会的エコロジー	130	2021 114～119	カトリシズムと政治
B・マッコーミック	新回勅『フラテリ・トゥッティ』の呼びかけ	130	2021 120～124	カトリシズムと政治
岡立子	〈巻頭言〉今日のマリア論について	131	2021 1～6	マリア論
M・マッケンナ	神学の内に示されるマリア論の新たな方向性	131	2021 7～16	マリア論
I・ゲバラ/M・C・ビンゲメア	貧しい人々と現代の「霊」が示すマリアの教義の意味	131	2021 17～40	マリア論
E・A・ジョンソン	マリア研究の母体としてのガリラヤ	131	2021 41～60	マリア論
B・E・デイリー	正教会とカトリック教会の神学におけるマリア論	131	2021 61～82	マリア論
P・プロスペリ	ニコラオス・カバシラスの『受胎告知についての説教』を読む	131	2021 83～101	マリア論
J・アローショ=エステベス	聖ヨセフ年 —父の心で—	131	2021 102～105	聖ヨセフ年
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	131	2021 106～112	霊性心理
石居基夫	〈巻頭言〉「恩恵論」に寄せて	132	2022 2～8	恩恵論
P・オキヤラハン	ルターと〈恩恵のみ〉	132	2022 9～26	恩恵論
L・マシュー・ペッツィ	恩恵と経験の神学的問題 —ロナガンの視点から—	132	2022 27～46	恩恵論
D・グルーメット	恩恵と「純粹自然」 —ド・リュバックの見方—	132	2022 47～67	恩恵論
J・コブレンツ	抑鬱状態における恩恵の可能性	132	2022 68～83	恩恵論
A・パリアリーニ	旧約聖書における「食べること」の役割	132	2022 84～96	旧約聖書神学
C・ドーメン	モーセ五書の構成と内容 —五つの五分の一—	132	2022 97～103	モーセ五書
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	132	2022 104～107	霊性心理
原敬子	〈巻頭言〉女性(おんな) —存在と所有の揺らぎ—	133	2022 2～7	女性をめぐる神学
B・ハレンスレーベン	神の霊との関係における女性の神学	133	2022 10～12	女性をめぐる神学
A=M・ペルティエ	カトリック教会と女性的次元	133	2022 13～16	女性をめぐる神学
A・デルミアンス	女性の神学とフェミニスト神学	133	2022 17～37	女性をめぐる神学
P・アレン	二十年後の『女性の尊厳と使命』と課題	133	2022 38～52	女性をめぐる神学
ヨハネ・パウロ二世	女性への手紙	133	2022 53～65	女性をめぐる神学
R・R・リュースー	キリスト教伝統における性差別と女性蔑視 —解放をもたらすために—	133	2022 66～83	女性をめぐる神学
A・M・イサシ=ディアス	ムヘリスタ神学 —伝統的神学への挑戦—	133	2022 84～101	女性をめぐる神学
S・A・ボング	アジアのフェミニスト神学から『ラウダート・シ』への応答 —人間／男のためだけでなく—	133	2022 102～120	女性をめぐる神学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	133	2022 121～123	霊性心理
光延一郎	〈巻頭言〉「神学的人間論」未完の展望	134	2023 2～7	神学的人間論
K・ラーナー	カトリック神学的人間論の提起	134	2023 8～20	神学的人間論
M・ドーク	性、人種、文化 —二十一世紀の神学的人間論—	134	2023 21～37	神学的人間論
W・ヴァン・ハイスティーン	何が私たちを人間とするのか —神学的人間論とキリスト論の学際的課題—	134	2023 38～54	神学的人間論
T・ダムズデイ	生物学的分類学に照らした神学的人間論の可能性 —トランスヒューマニズムをめぐる—	134	2023 55～65	神学的人間論
J・ロジャーズ	シノダリティのための知恵	134	2023 66～74	教会論一般
M・サール	典礼参加へと招かれて(一) —典礼参加の三つの段階—	134	2023 75～93	典礼神学
E・オットー	旧約聖書におけるトーラー —五書の成り立ちとその意義—	134	2023 94～102	五書
ホン・ソナム	私は思ったより大丈夫	134	2023 103～105	霊性心理

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

イグナチオ・デ・ロヨラ

ホセア

総目録

総目録

社会倫理

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

総目録

ペンテコスタル

『使徒的書簡 父の心で』

ルター
ルター
ロナガン
ド・リュバック
心理学